

神待ちガールフレンドズ

©サワムラヨウコ

・登場人物・

クレナイ

青（あお）

呉 泰星（くろ たいせい）

徳山 冴子（とくやま さえこ）

村崎 務（むらさき つとむ）

紺野 眞名（こんの まな）

按田 桃江（あんだ ももえ）

緑川 聡寛（みどりかわ さとひろ）

黒田 雅夫（くろだ まさお）

*

今様（いまよう）

八百屋のオヤジ

通行人A（女）

通行人B

通行人C

警官A

警官B

女子高生（声のみ）

オープニング

暗闇の中。

音楽①（静かで少しセンチな曲）が流れ出す。曲はセリフが入ったらボリュームダウンして、そのままBGMで流れ続ける。

照明、ブルーでフェードイン。

舞台上には、上手に冴子・泰星、下手に桃江・青がいる。上手・下手のそれぞれに机と椅子が置かれており、上手では泰星が机に向かってお絵かきを、冴子はお出掛け前の身支度を、下手では桃江が机に向かって化粧を、青が立ってケータイをいじっている。

上手のふたりにスポットが当たる。

泰星は、昭和五十九年ごろに流行った歌謡曲を鼻歌で口ずさみながら、絵を描いている。

冴子

泰星、ちよつと泰星！ 退きなさい。お母さんもうすぐ出掛けんとあかんねんから……。

泰星

え？！ ご飯は？ お腹減ったあー！

泰星、冴子に席を譲りながら膨れっ面をする。

冴子、身支度に急いでいるためイライラした表情をしながらもそれを抑えて、素早くサイフから五百円紙幣を一枚抜き出して泰星に押し付けるように渡す。

冴子

はい、五百円。こんだけあつたら、そのホカ弁でお弁当とジュースくらい充分買えるやろ。

泰星

えー……またお弁当？

冴子

文句言わへんの。お母さん、忙しいんやから。毎日あんたのために働いてるんよ。明日のご飯、食べられんくなつてもええの？！

泰星

……。

冴子

ゴミはちゃんとペランダのゴミ箱に捨てるんよ、いい？ 家の中に置いておいたら、すぐゴキブリが出るんやからね。判った？

泰星

……はい。ねえ、今日は誰に会いに行くの？

冴子

何言つてんの、仕事や。お客さんのとこに行くの！

泰星

眞名じゃないね。

冴子

はあ？

冴子、睨むようにして泰星に振り向く。

それと同時に、上手のスポット、落ちる。
切り替わって、下手のふたりにスポットが当たる。
青、ソデの方を向いてケータイをいじってメールを打っている。桃江、机に向かって化粧をしている。

青 じゃ、白木ん家に遊び行ってくる。

桃江 待ちなさい、青！ あんた、今日の約束、忘れてるんじゃないでしょうね？

青 約束？ 何の話？

桃江 3時に、駅のテレビ前。あんたのこと、高く買ってくれるって人がいるんだから……昨日、言っただでしょ？

青 あのねえ……

桃江 若いっていいわねえ。「十六歳で処女」って書き込んだけば、いくらでも買い手が付くんだから。一晩で十五万って、サギみたいな値段。あ、ゴムは付けなさいよ。性病は感染されたら厄介だからね。

桃江、言いながらコンドームを青に投げて寄こす。青、手の中のゴムを一瞥して睨み、視線を戻す。

青 冗談じゃないよ！ 前も言っただでしょ？！ あたしはあんたに指図されてウリ

をやるつもりは一切ないの！ どの世界に自分の娘を売春させて生活費稼ごうって親がいるよ？ 聞いて呆れるよ！

キレた青に対して、桃江、激しく机を叩いて立ち上がり、青以上の剣幕でまくし立てる。

桃江 誰があんたを産み育てたと思ってんだい！ 親に向かって「アンタ」だあ？ 聞いて

呆れるのはこっちだよ！ 口の利き方に気をつけな！ お前なんてあたしが居なけりや、今頃その辺の路上に野垂れ死んでもおかしくないんだよ？！

途中で下手・奥より、クレナイが出てきてセンターまでゆっくり歩いて止まる。

手にはダンボールと毛布を持っていて、泰星・冴子と青・桃江のちょうど真ん中の後ろで、ホームレスのていを演じる。その間、手前ふたりの会話は進行中。

青 誰も、産んでください、なんてお願いしてないだろ！ 勝手に産んだのはあん

たじゃないか！ 親には子供を育てる義務があるんだ！

桃江 はあー、ヤダヤダ！ 最近の子供はちよーっと学校で習った知識をばべらかして「権利」ばかり主張したがる！

流れ続けていた音楽①、後の会話をかき消すようにポリウムアップ。

一息置いてから、その音楽①に重なるように、テーマ曲が入る。

同時に、青と桃江はパントマイムで言い争いを続ける。

上手の親子2人も、冴子が呆れたように泰星に言って聞かし、泰星が膨れっ面でそれを渋々聞いている様子を表現する。

センター奥のクレナイ、地面に敷いたダンボールの上におもむろに靴で乗り、持つてきた毛布を両手で大きく広げて自分の身体を毛布で隠す。そのまましゃがみ込み、毛布を被ったまま蹲る。

曲調が変わったところで、上手／下手、それぞれのソデから、八百屋・通行人A・B・Cが平行に歩きながら出て来て、冴子・泰星・青・桃江の前を交差しながらでたらめに動いて通り過ぎる。舞台上に居た4人はそれぞれの前を横切った人の流れにあわせて歩調を合わせて一緒に歩き出す。八百屋・通行人A・B・Cと、冴子、桃江は、そのままずっと歩いて左右のソデにはける。

舞台上に残った泰星・青は、交差した際に位置が入れ替わって、上手に青、下手に泰星が来ている。

センター奥で毛布に包まっていたクレナイ、手ぶらで立ち上がってゆっくり下手に歩いて行き、泰星の背後に立って目を閉じる。泰星、クレナイを見上げるように振り返って、クレナイの身体を廻るようにしてソデへはける。

舞台上に残る、青とクレナイ。ふたりは少し俯いて目を瞑り、正面を向いて立っている。曲調の変化に合わせて、ゆっくりと目を開きながら顔を上げ、顔だけでお互いを振り返る。

音楽、エンディングのフレーズに差し掛かったところで、ブルー照明、フェードアウトして、暗闇になる。

バックスクリーンに、タイトル文字の射影。曲が終わる前に文字、消える。

テーマ曲、自然に消えるのを待つ。

暗闇の中。

効果音・PCのクリック音。

バックスクリーン、斜め左上に、タイプライタで打ったような形で文字が映し出される。

「お腹へって死にそう△△ マックでいいから奢って！ 何でもするから。 RIN A」 「もう一週間以上、布団で寝てません。湯船につかりたいよお。一晩でいいので泊めてください。 ☆まゆみ☆」 「5泊とめてくれる方☆ 体力には自信あるよん♪ 夜遅くまでがんばっちゃいます！ ナチ」

文字が射影されている間、青と友人の間延びしたダルそうな会話が声のみで流れてくる。

女子高生(声) あおー。

青(声) んー？

女子高生(声) 性欲とセックスの間に、アイは存在すると思う？

青(声) アイい？ あるわけ無いじゃん、そんなの。

女子高生(声) ……だよー。

青(声) これってサクラかなあ？ 今時のギャルは言うこと違うね。

女子高生(声) え？ なん？

青(声) あー、独り言ひとりごと。

少し間が空いて、効果音・ケータイで打ち込みをする「ピッピ」の音。

「だれか助けて！ お金なくなつてネカフェにも行けません。寝る場所がほしい。

あおー

「RES: 僕の部屋においでよ！ 部屋が広くて寂しいですw あおちゃんはいくつかな？ イマエウ」

「RES: RES: 16です☆ 個室ありますか？。(´o`)。あお」

「RES: RES: RES: 間取りは1Rだよw 会えるの楽しみ☆(´▽´) イマエウ」

青(声) げ。キモっ！

照明、全灯。

効果音・街の喧騒。クレナイのセリフが入ってからフェードアウト。

舞台には、センター奥でクレナイが路上の絵描き商をやっている。座った前に何枚かの絵を並べて置いていたり、自らの脇には「絵、描きます！ 絵師・クレナ

イ」などと書かれた手製のダンボールで作った立て札なんかが置いてある。
上手より、通行人A歩いてくる。

クレナイ

あなたの大事な写真を、絵に起こしますよー。1枚五百円！ あ、そのお姉さん！ 一枚描いていきませんか？

通行人A

いえ、結構です。急いでので…。

通行人A、クレナイに声を掛けられたため、急に小走りになって下手へはける。

クレナイ、去っていった通行人Aを顔だけで覗き込むようにして見送り、元に戻す。

下手より、二人連れの通行人B・Cが楽しげに会話をしながらクレナイの前を通る。

クレナイ

現在修行中の絵描き・クレナイでございます。——— どうです？ 絵に興味ありません？

通行人B・C、互いに顔を見合わせて、殆どクレナイを無視して通り過ぎて、上手へはける。クレナイ、自棄になってひとりゴチる。

クレナイ

ですよー、道端でいきなり絵を描いてもらおうなんて、まず！ 思わないですよー。はあー。

クレナイ、うな垂れてから、ぶつぶつひとりゴチながら、広げた絵をゆっくりとした動作で片付けだす。

クレナイ

こんな生活とも、今日でオサラバ、か……。

しみじみと感傷に浸るクレナイ。

下手より、青いリボンの制服の女子高生・青が走りながら登場。下手まで走ってきて、立ち止まって呼吸を整える。青、走ってきた方向をチラチラと気にしながら、鞆の中から盗ってきたサイフを取り出し、中身を確認する。

青

ちっ、シケてんな！ 野口ひとりだけかよ。

青、サイフから野口英世（千円札）1枚を抜き取ってポケットに詰め込み、用無しになった財布をセンター側に投げ捨てる。

クレナイ、青のことには気付いていない様子で、自分の絵を想い出を思い出しな

がら一枚一枚眺めて整理している。

下手より、「ドロボー!」「誰か捕まえてー!」の叫び声がして、八百屋のオヤジと通行人Aが走って入ってきて、下手のソデを出たところで立ち止まって青を指差す。八百屋は手にダイコン(目立つ野菜)を持っている。

八・通A

あ!

青

げ。

八百屋

お前! よくもウチの野菜を!

通行人A

あたしのサイフ返して!

鼻息も荒く青を睨むふたり。青、急に余裕の態度に出る。

青

ちよつとお、ヘンな言いがかり付けるのはよしてよ。こーんないたいけな女子高生が、万引き…ましてや野菜なんて盗るわけないじゃん。

八百屋

確かに。

青

それにオバサン! サイフ、落としたんじゃないの? そこになんか落ちてるけど。

通行人A

あ、あたしのサイフ!

通行人A、サイフを拾って、はたいたり外見のチェックをして確かに自分のものであることを確認する。

八百屋

いやいやいや! 騙されんぞ! ちゃんと目撃情報もあるんだから! お前は確かにウチの野菜を…ウチのキュウリを1本、失敬しただろ?!

青

フツ…、目撃情報の聞き間違いじゃない? 誰がそんなこと言ってたのよ?

八百屋

一丁目の奥さんだ。

青

あー…、あの奥さんね。あのね、真の目撃者はあたし! あたしがあの奥さんに言っただけなんだから…。キュウリ盗ってたのは、この男よ!

青、急に関係のないクレナイを指差す。八百屋・通行人A、一斉にクレナイを振り向く。

きよとん、とするクレナイ。

クレナイ

え?

八百屋

そうか…お前か…!!!

ダイコンを振りかざしてクレナイに襲い掛かる八百屋。慌ててそれを交わすクレ

ナイ。

クレナイ わわっ！ ちょっと、何なんですか？！

八百屋 出せ！ うちのキュウリを出せ！

クレナイ きゆうり？？ 何の話？

八百屋 喰ってしまっただけとは言わせんぞ！ 吐け！ 今すぐ胃の中から出せ！

通行人A あー！ ない！ あたしの千円！ あたしの全財産がないー！

「ごちゃごちゃ3人がやってる間に、青、上手へ走って去っている。」

クレナイ おっさん！ 落ち着けて！ 落ち着いて考え整理してみいや！ 喰ってしまっ

八百屋 たもの嘔吐されても、困るやろ？

「当たり前だろ！ 何言ってるんだ？」

クレナイ いやいや！ アンタさっきオレにキュウリ吐き出せとか何とか言っとったやん！

八百屋 そうか。すまん、興奮して悪かった。

何とか和解し、呼吸を整えるふたり。

八百屋 で、キュウリは？

通行人A あたしの千円！

クレナイ だから、何の話なんですか？

八百屋 ワシの店のキュウリが1本、パクられたんだよ！

通行人A あたしの千円がスられたの！

クレナイ 小っさ！ どっちもちっさ！

通行人A ちよっとアンタねえ！ あたしの全財産だったのよ！

クレナイ 知りませんよ、そんなこと！

八百屋 ひとつひとつはちっさいことかもしれんが、毎度のこととなると被害も甚大になどつるんじゃない！

通行人A 最近、この辺の界限で女子高生の万引きやスリが流行ってるんですよ！

クレナイ へえ、女子高生ねえ。

八百屋 今日こそはとっ捕まえてやろうと思って、こっやって慌てて出てきたんだ。

クレナイ そうだったんですか……。でも、完全に見失っちゃいましたね。

八百屋 え？

クレナイ さっきの女子高生でしょ？ あっちに走ってっちゃいましたけど。

クレナイ、青のハケた上手側を指差す。

通行人A
八百屋

まあ！
しまった！

八百屋・通行人A、「待てー！」「あたしの千円ー！」「キュウリー」などと言いながら、上手へ走り去る。

クレナイ

やれやれ。なんやっただんだ…。酷いとはっちり受けたなあ。

クレナイ、上手奥を眺めながら一息つき、ふたたびセンター奥の自分のテリトリーに戻って片付けをしだす。

若干の間の後、青、上手より走って戻ってくる。下手のほうで立ち止まり、呼吸を整える。

青

しぶとい奴ら！ なんとか撒いたか…。

クレナイ

あ！

青

何よ？

クレナイ、片付けてた物を乱暴にその場に置き、青のほうへ歩み寄る。

クレナイ

さつきはよくもオレに罪を擦り付けてくれたな！

青

ああ…ゴメンゴメン。ちようどいいところにアンタが居たからさあ。

クレナイ

万引きしたのも、財布スったのも、どうせお前なんやろ？

青

これ？ すきなよ、キュウリ。

青、平然と鞆から生キュウリを出してみせる。

クレナイ、呆れて肩を落とす。

クレナイ

よくあれだけの嘘がいけしやあしやあと口から出てくるもんやな！ 呆れを通

り越して、感心するわ、全く！

青

それは、どうも。

クレナイ

褒めてへん！ 褒めてへんから！

青

今日の収穫は千円か…。これじゃあ、ネットカフェにも泊まれやしない。

クレナイ

おい、お前！ ムシすんな！

青

煩いなあ、さつき謝ったじゃん。まだ何かあんのお？

クレナイ

あのね、オレはケーサツでもセンセイでもないけど、お前には一言言わせて貰う！ 楽して金を手に入れようなんて言語道断やぞ！ オレなんて不景気の煽りをモロに喰らって人件費削減のため解雇されて、今はこうやって路上でほそ

ぼそと絵を描いて憤ましく生きてんの！ そうや、絵なんて売れへんわ。三日に一枚売れたらええ方やわ。無名の画家の一枚の絵の値段なんて、どれくらいやと思う？ お前らみたいな高校生が、ちよつとした出来心でやる万引きやスリの額に比べたら、微々たるもんや。税金も納めたことの無い学生の身分で、楽して生きてこうなんて、根性腐つとるわ、全く。……どうせ、遊ぶ金欲しさにやつとるんやろ？

青

はあ？！ 違うわよ！ 黙って聞いてりや、ペラペラペラ好き勝手に喋っちゃって！ 何？ リストラされて？ お金がなくて困ってますう？ あたしだって毎日一食のご飯確保すんのにさえ困ってんだから！ この1本三十八円のキュウリだって、貴重な食料なの！ なんの事情も知らないくせに、憶測だけで人を判断して、自分だけが苦勞してるみたいに言わないで！

一気に捲くし立てたふたり、お互いを睨みながら、荒い呼吸を暫く整える。

クレナイ

……お前、家出でもしとるんか？

クレナイ、怒り調子を改め、普通に問うように聞く。

青、はつとなつて、少し俯いて黙り込む。

クレナイ

図星やな。……ま、確かに事情は知らんわな。どんな事情で家に帰れへんのんかも、はたまた、帰る家が無くなったんかも。……勝手にお前のこと判断して、悪かったわ。

クレナイ、青に背を向けながらい、路上に広げた自分の絵の片付けに戻る。

青、対応の変わったクレナイに対して、一抹の希望を抱くと同時に、意を決して口にする。

青

……あの！

クレナイ

んー？

青

……名前！ なんて、ゆうんですか？

クレナイ

クレナイ。

青

クレナイ……。あの、クレナイさん！

クレナイ

ほいさ？

青

今夜、あたしと一緒に、寝てください！

クレナイ、ビックリして、ゆっくり振り返る。

青、真剣に、礼儀正しくお願いしている。

クレナイ

…はあ？

青 あたしに、寝床を提供してください！ 屋根のあるお部屋で横になりたいの。
何でも…するから！

クレナイ、突然の申し出にぼかーんとしている。

暫くの間のおと、閃いたように手をポン！と叩く。

クレナイ

ああ、援助交際？ アカンあかん、聞いとらんかったんか？ オレ、お金持つてへんねん。お断りします。

青

違う！ お金なんて要らないよ！ 布団で寝たいだけなの！ だからあ…あんたの部屋に入れて、ってお願いしてるのよ。お礼はちゃんとするからあ。

クレナイ

え？ お前、金無いんやなかったっけ？ お礼って何よ？

青

もおおー！ 何でピンと来ないのよ、この鈍チン！ ……うううう。

青、艶かしい雰囲気ですカーとチラツと捲る素振りを見せる。

クレナイ

何？ 暑いん？

青

バカー…！ この、アホー…！ 何で？… 判るでしょ、ふつう！ S・E・X、します、って言ってるの！ 女の子にここまで言わせんな、バカ！

叫んだ青、肩で荒い息をしている。

クレナイ、溜め息をひとつ。白けたような態度。

クレナイ

残念やけどオレ、オンナとガキには、キョーミないの。

青

…はい？

クレナイ

苦手なんよ、女の人と子供って。

青

ホモ？

クレナイ

違います！

青

だよねえ？！ じゃあさ、じゃあ、何で？ 駄目なの？ もしかしてED？ 出来ないから？

クレナイ

あ、の、ねえ！ お嬢ちゃん。いまこゝ、公衆の面前。あんまし隠語ばかり出さなように。

青

あ…ごめーん☆

クレナイ

オレはね、単にガキとオンナにいい想い出持つてへんから、苦手なだけ。そしてお前は女で、しかもガキ。…とこのことで、寝床なら他あたって。シッ、シッ。

青

そんなあ。あたし、ガキじゃないもん！ …ケチ！ インポ！

クレナイ

うつさい！ 違う！

軽いケンカ別れをしたふたり。

青はふたたび下手に戻り、ケータイをいじりだす。

クレナイはセンター奥で片付けの続きに戻る。

上手より、今様、ケータイをいじりながら登場して上手の前側で立ち止まる。

服装からしていきなり変態っぽい出で立ち。

ケータイでメールをチェックし、時折ニヤニヤしている。

青、時計を一度見る。

今様も時計を一瞥し、顔を上げて周辺を見渡して待ち合わせの人物を探す。

メールを見てから、もう一度顔を上げて青をじっと見る。もう一度確認し、青を凝視。そして確信を持って青に近付く。

今様

あの……えへ……もしかして、キミが「あお」ちゃん？

怪訝な教条で今様を一瞥する青。

今様、舐めるように身体を上下させて青の全身を見て満足し、持ってた鞆の中からSM女王様セット的なものを取り出してワンパフォーマンスする。

それを見て青さめる青。慌てて返答。

青

ちが、違います！

今様

ウソだあ、絶対キミが「あお」ちゃんですよ？ 青いリボンの制服に紺のハイソックス履いた黒髪の女の子。メールで教えてくれた特徴と同じじゃん！

青

人違いです！ 近寄らないで！

今様

想像してたよりかわいいなあ……。あ、判つてると思うけど、ボク、イマヨウね。

コンサマ、って呼んでね！ あ、あのね、「イマヨウ」って漢字で書くと「暇なう」

「待ち合わせなう」「帰宅なう」の「今」に、「上様」「殿様」「王子様」の「様」なのね。

あ、興味ない？ ごめんね、どうでもよかったね、ボクの名前なんて。「王子様」

だなんて、今日の僕はキミの奴隷なのね、えへ。じゃ、あおたん、早速ボク

のお家に行こうか。

青の背後・下手より通行人たちが数人バラバラと歩いて入ってくる。

青の反応には動じず、終始明るく独り言を言っ、必要以上に身体を近付けようとする今様。

青、これを避けようと大きく後ずさりする。

その弾みで通行人に混じって歩いてきた緑川にぶつかり、青は下手側に、緑川は上手側にと、ふたりは大きく動いて互いに振り返り向き合う。

緑川

その瞬間、青・緑川以外はストップモーションになり、照明も切り替わる。

純粹ぶるなよ、青。お前の身体には母親から引き継いだ、穢れた血が流れてんだ。

表情を強張らせる青。

照明、切り替わり、音楽が流れ出す。

それにあわせて、通行人たち・クレナイ・今様は舞台上を駆け回り、場面転換へ。その間、強張った表情の青と意地悪にやつく緑川は互いを見ている。

駆け回っていたメンバーがはけだして、入れ替わりに桃江が入り、緑川もはけていく。

青と桃江が舞台に残り、暫くして音楽・照明、フェードアウト。

桃江、デジカメを片手に、青に指示している。制服姿の青の写真を1枚撮る。
効果音・シャッター音が入る。

じゃ、脱いで。

はあ？

「はあ？」じゃないわよ。脱ぎなさい、って言うてんの。次は下着姿の撮影。

ちよつと、制服姿だけでいいんじゃないの？！

バカじゃないの？ 今時売れっ子のアイドルだって脱いでんのよ？ 素人が脱がずに売れるわけ無いじゃない。

……顔は絶対……！ に写さないでよ！

判つてゐるわよ。

青、しゅしゅその場で制服を脱ぎ始める。ペビードールのような下着姿になる。

早くしてよ！

ちよつと、あんた、なんかポーズ取りなさいよ。

下着でポーズ取る素人なんて怪しいだろ！ これでいいんだってば！

まあ……それもそうか。じゃあ撮るわよ。

効果音・シャッター音。

桃江、撮影し、写り具合の確認をしている。

もういいよね？！ 着替えるよ！

はいはい。

青、桃江の返事を待たずに言いながら制服に着替えたす。

桃江、生返事をしながらその間デジカメの画像のチェックをしている。

早々に着替え終わった青、桃江の横を通り抜けて部屋から出て行くとする。

あー、青。この後、緑川さんが来るから。早く出て行ってね。

……言われなくても！

一旦は立ち止まって桃江の言葉を聞いていた青、言葉を聞いてから足早に出て行く。(自室に戻った)

桃江、セリフを言う間もずっとデジカメをいじたままで青に目を向けようともしない。

効果音・玄関のドアが開く音がして、緑川が下手より入ってくる。

緑川

上がるぞー。

桃江

緑川さん！ 早かったのね。あ、ちょっと待って、お茶でも淹れるわ。

緑川

いいよ、お茶なんて。桃江の淹れるお茶は不味いからな。

桃江

うそ！ ひどーい。

緑川、桃江に抱きつき、いちゃいちゃする。ふたり、ラブラブモードにて。

緑川

こないだの、足りたかい？

桃江

ええ、お陰で滞納していた家賃も払えて、大家さんに追い出されずに済んだわ……。あなたには感謝してる。感謝してもし足りないくらいよ。

緑川

違うよ。そっちのお金じゃなくて、青ちゃんの教科書代のことよ。

言いながら、緑川の手つきがエスカレートしそうになる。桃江、慌ててそれを止めようとする。

忘れ物(鞆？)を取りに戻った青。ふたりの姿を認めて、思わず半歩後ずさって立ち止まる。青が来たことには気付かないふたり。

桃江

青……あ、ちょっと、待って。まだ奥に青がいるの。

緑川

別にいいじゃないか。いや、むしろちよっどいい。

桃江

え？ どういうこと？

緑川

次は、青に相手をさせてくれよ。

桃江

……え？

緑川

一度、女子高生を抱いてみたかったんだよなあ。な、いいだろ？

硬直し、言葉を失う桃江。青も同時に驚いて緑川を見遣る。

緑川

なあ桃江。聞いてんのか？

桃江、静かに緑川の傍から少し離れる。

桃江

あの子には……手を出さないでよ……。

緑川

は？ 何？ 妬いてんの？

桃江

ふざけないで！ あの子はまだ十六なのよ？

緑川

だからいいんじゃないか。ピチ。ピチの女子高生！って感じで。

桃江

十六なんてまだ子供よ。・・・あなたを満足させられるわけ無いわ。

緑川

桃江：・・・どうしちゃったんだ？ お前らしくない。娘のワイセツ写真をネットで売り捌いてるくせに。どうちも同じことだろう？

桃江

……。せめて・・・せめて高校卒業するまでは待ってあげて。

ずっと緑川を睨むように見ていた青、桃江が自分を庇ったことに驚いて桃江に視線を向ける。

緑川、物腰柔らかめだった調子がガラリと変わる。

緑川

おいおいおい、なんか勘違いしてないか？ お前たち親子が生活できてんのは誰のお陰だよ？ バカな娘が高校行けるのは、誰が学費払ってやってるお陰だよ？！

桃江

そ、それは……

緑川

早く呼べよ。奥にいるんだろ？

動けないでいる桃江。苛立つ緑川。

緑川

早くしろって！

桃江

・・・判ったから。怒鳴らないで。お願い……。

桃江、力無く言って、ひとり奥の間へ呼びに向かおうとする。
それを見た青、慌てて奥に引込む。

桃江

青ー！ 居るんでしょ？ ちょっと来なさいー！

青

……なに。

青、知らない素振りですつものように不機嫌そうに入ってくる。

桃江

緑川さんがあんたにお話があるって。

緑川、にこりと微笑む。反応しない青。

桃江、言って直ぐに家から出て行く。(下手)

緑川

やあ、青ちゃん。勉強は進んでるかな？

青

……白々しい。(ボソッと)

緑川

いけないなあ、そういう態度は。人に何かをしてもらったときは、お礼を言う

青

もんなんだよ。学校で習わなかったかい？
…別に、頼んでないけど。

青、独り言のように小声でボソボソ喋る。

作り笑顔で青を見守っていた緑川、急に大股歩きで近付き、勢いよく青の手首を掴んでねじり上げる。

青

痛っ！

緑川

——言葉にできないようなら、態度で示してもらおうか？

緑川、急に笑顔が消え、低い声で言う。

青、引きつった表情で緑川を振り返って見る。

効果音・街の雑踏フェードインして極端に大きくなる。

瞬間、左右のソデから通行人たちが一斉に歩いてきてふたりをかき消すように交差する。

通行人に混じって入ってきたクレナイ・今様、そして青の3人、シーシーのラストの配置になる。

効果音・街の雑踏フェードアウト。

今様、ケータイでメールをチェックし、時折ニヤニヤしている。

青、時計を一度見る。

今様も時計を一瞥し、顔を上げて周辺を見渡して待ち合わせの人物を探す。メールを見てから、もう一度顔を上げて青をじっと見る。もう一度確認し、青を凝視。そして確信を持って青に近付く。

今様

あの……えへ……もしかして、キミが「あお」ちゃん？

怪訝な教条で今様を一瞥する青。

今様、舐めるように身体を上下させて青の全身を見て満足し、持ってた鞆の中からSM女王様セツト的なものを取り出してワンプフォーマンスする。それを見て青さめる青。慌てて返答。

青

ちが、違います！

今様

ウソだあ、絶対キミが「あお」ちゃんでしょ？ 青いリボンの制服に紺のハイソックス履いた黒髪の女の子。メールで教えてくれた特徴と同じじゃん！

青

人違いです！ 近寄らないで！

今様

想像してたよりかわいいなあ……。あ、判つてると思うけど、ボク、イマヨウね。コンサマ、って呼んでね！ あ、あのね、「イマヨウ」って漢字で書くと「暇なう」「待ち合わせなう」「帰宅なう」の「今」に、「上様」「殿様」「王子様」の「様」なのね。あ、興味ない？ ごめんね、どうでもよかったね、ボクの名前なんて。「王子様」だなんて、今日の僕はキミの奴隷なのね、えへへ。じゃ、あおたん、早速ボクのお家に行こうか。

ひとり明るく独り言を言つて、必要以上に身体を近付ける今様、青の肩に手を回した瞬間、クレナイがその手を払いのける。クレナイ、青を庇うように背後に立つて。

今様

ななな……！ なんだね、ちみわ！

クレナイ

うちの娘に、何か用ですカッ？

青・今様

えッ、ムスメ？！

クレナイ

うちの娘に、何か用ですカッ？！

カんで威嚇するクレナイ。たじろぐ今様。ぽかーんとしてクレナイを見つめる

青。

今様

き、きさまら……！ 騙したな！ 美人局（つつもたせ）なんて卑怯な手口使いやがつて！

クレナイ

美人局って、まだ何も取ってへんやろ。

今様

これから要求するつもりなんだろ？！ ボ、ボクはその手には乗らないぞ！ 乗らないからな！

中央から下手寄りでいがみ合う三人。無言になっても、今様は「うー！」と唸り続け、クレナイは青を庇いながら「シッ、シッ！」とやっている。

上手より、婦人警官ふたり組みが登場。警官A、手帳をめくりながら歩いている。

警官A

今日もスリ2件に、万引き3件。被害総額、十八万三千百三十八円、か。盗られた物は、ダイヤのネックレスに指輪、それに……キュウリ。

警官B

キュウリ？

クレナイと青、顔を見合わせる。「ダイヤのネックレス」のあたりでは、疑う視線のクレナイに、青は激しく首を横に振る。

警官A

商店街の八百屋から被害届が出てんのよ。あと、最近の目撃情報では、親子ぐるみの詐欺もこの辺で発生してるらしいから、注意して。

警官B

ああ、父親と娘が共謀してやるやつね。売春する素振りを見せて客を誘っておいて、途中で父親が出てきて金だけ脅し取る、ってやつ？

今様

あ。

今様・クレナイ・青、警官ふたりと視線がぶつかる。

一瞬止まる5人。

警官A

父と娘？

クレナイ

逃げろ！

音楽②（徒競走時に流れそうな軽快な音楽）、流れ出す。

同時に照明、カラーに切り替わる。

クレナイ、青の手を引いて走り出す。

二人が逃げたため、警官A・Bもそれを追って走り出す。今様、なんだかよく判らないが、彼らの後を追って走り出す。

5人、舞台上で追いかけてをしながらぐるぐる回って、クレナイの抱えた大荷物(ダンボールや毛布)をバトンのようにみんなで受け渡しして、また戻して、を面白おかしく繰り返す。最終的にクレナイの荷物は自分の鞆(リュック)のみになり、今様、警官ふたりがの順にそれぞれの方向にクレナイの荷物を持ってハケて行き、舞台上には青とクレナイだけが残る。

照明、ブルーに切り替わる。夕方。

音楽②、フェードアウト。

効果音・港の音(波の音・汽笛・カモメの鳴き声など)、消える音楽に重ねてフェードイン。

暫く走った後、クレナイ、後方をチラチラ確認しながら歩調を緩め、やがて立ち止まる。このとき、握っていた青の手を自然に離す。

青、握られていた手と、クレナイを交互に見つめている。

クレナイ

あの男、上手く騙せたと思ったのに、ケーサツの奴らタイミング良すぎ！なあ、青？

青

……うん。

クレナイ

どうした？ 元氣ないな。さっきの男と、待ち合わせしてたんやろ？ 安心して。大丈夫、上手く撒けたで。

青

……うん。

クレナイ

なんやねん？ お前らしくない。さっきまでの潔さはどうした？

青

……ねえ、何で急に、助けてくれたの？

クレナイ

はあ？

青

何で急に、父親のフリなんかして、あたしを助けてくれたの？

クレナイ

何でって、そりゃあ、お前が嫌がってたから……。

青

……なんか、ヘンだ。この感情。

青、突然、クレナイの手を掴み、両手で握る。

青

あたし、あんたに、恋しちゃったかも。

クレナイ、きょとんとした表情で、握られた手と見つめてくる青の顔を交互に見て、噴出すように笑う。

クレナイ

お前、単純やなあ。

青

なにが可笑しいのよ？

クレナイ

それって「吊り橋現象」ってやつやろ？

青

え……。

クレナイ

ほら、危機的状況を共有した男女は恋に落ちたと錯覚するっていう、あれ。

青、言い返せずに膨れっ面を作って黙り込む。

クレナイ

別に、お前を責めたり笑ったりはせえへんよ？ ……オレもね、お前くらいの年の頃には、年上の女の人に憧れたわ。あの人は…：そうやなあ、ちょうど、いまのオレの年くらいやったかな。

青

クレナイの、好きだった人？

クレナイ

そう。

音楽③、流れ出す。

泰星、クレナイの後ろから翔るように出てきてクレナイに重なるようにして立つ。視線はクレナイと同じ方向を向いている。（そのため、青からも少し外れた位置）

クレナイ

あの頃…：オレは高校生で、あの人は幼い息子を抱えた母親だった。

音楽③、ボリュームアップ。

音楽のキリがいい部分で動き出す。泰星をその場に残したままクレナイが横にずれて、青はクレナイと交差するように歩いて行きそのままソデへはける。

クレナイ、泰星を振り向き、ふたりは暫く確かめるように見つめあう。

音楽③、徐々にボリュームダウンしてBGMになる。

照明、切り替わって全灯になる。

泰星、手に持ったネコじゃらしを振り回しながら、昭和60年ごろに流行っていた洪めの歌謡曲（ex「ワインレッドの心」など）を鼻歌で歌っている。

クレナイ、転じて、眞名。舞台奥の方から笑顔で泰星に近付いて、適度な距離で立ち止まる。

眞名 なに唄ってんの？

泰星、一瞬口を止め無感情に振り返って、直ぐに元に戻って唄いだす。
音楽③、フェードアウト。

眞名、暫く一緒にフレーズを口ずさんで気付く。

眞名 つてこれ安全地帯？！ 洪っ！ 「ごどものクセに？！

泰星 ……母さんが好きな唄。

眞名 ああ、冴子さんが…。

泰星、「タッチ」や「想い出がいっぱい」など子供っぽいアニソンに変える。

眞名、喜んで一緒に口ずさむ。

泰星、急に唄を止めて無感情に言う。

泰星 ごどもらしく、こんなんが良かった？

眞名 ……別に、何でもええよ。それより泰星（たいせい）、勝手に幼稚園、抜け出したらアカンやろ！

泰星 なに、説教？

眞名 みんな心配しとつたで！ こんなトコに居ったら、何処行つたか判らへんやん。冴子さんかて片親で苦労してお前を育ててんねんから、余計な心配、掛けさせんよーに！

泰星 ……だって母さん、時間になつてもお迎え来えへんもん。

眞名 帰るで、ほら。

眞名、手を繋ごうと片手を差し出す。泰星、その手を一瞥はするが、ムシして歩き出す。

眞名、出した手を引っ込めて、泰星の横に並んで一緒に歩く。

泰星 眞名。

眞名 んー？

泰星 こんなことしててええの？

眞名 え？

泰星 だって眞名、高校生やんな？ 学校、またサボつたん？

言葉に詰まる眞名。「あ、えと、それは……」など、言葉にならない声で繋ぐとする。

泰星

バイト帰りに、おれのこと探しに来たんやろ？

眞名

泰星、オレは、

泰星、立ち止まって眞名に対して諭すように言う。

泰星

バイト、辞めえよ。バイト辞めて、ちゃんと学校行きいよ。後悔すんで、絶対！

眞名

……ありがとう、泰星。でもな、オレ、後悔なんてしいひんよ？ バイトしてお金稼いで、泰星のお迎えに行つて。そうやって冴子さんの役に立つことが、ホシマに嬉しいんや。

泰星

………うかい、するよ……。

真相を眞名本人には言えない、泰星。同じ言葉を、小さくひとり呟く。

そんな泰星の計らいや態度の変化には気付かない眞名。

眞名、自己満足の世界に入っている。

眞名

ま、まだ泰星には解らへんかもなー。もちっと大きくなって、好きな人が出来たら、オレの言ってる意味がわかるようになるわ。

泰星

そーかなあ？

眞名

そーなの。

舞台上を円を描くように歩いていたら、泰星が下手側の舞台前方に公衆電話を見つめる。実際の小道具は無し。

泰星

あ！ 電話。帰る前に、家に電話せん！

眞名

ああ、そうやな。

公衆電話の元(下手前方)に駆け寄る泰星。

眞名、少し距離を置いて立ち止まり、泰星の電話が終わるのを待つ。

効果音・受話器の持ち上げる音、プッシュトーン、呼び出し音、が泰星の動作に合わせて入る。

これにあわせて、照明、薄暗く落ちる。

呼び出し音が響く中、上手から冴子、黒電話を敢えて手で抱えて登場。ネグリジェのようなエロっぽい恰好をしている。

スポットライト、登場と同時に冴子を追いかける。

電話の会話が始めると、ブルーの中、泰星・冴子のふたりにスポットが降りた状態になる。

冴子 はい、もしもし、徳山です。

泰星 あ、母さん、おれ。

冴子 なんや、泰星？ 何の用？

泰星、眞名に聞こえていないことを確認しつつ、前半は憚りながら言う。「眞名も一緒に居る」という部分は、わざと眞名にも判るように、敢えて明るく大きく言う。

泰星 いまから帰るんやけど、大丈夫？ …眞名も一緒にやで！

冴子 え！ もうそんな時間？！ ちよ、ちよっと待って！ いま、何処から掛けてきてるん？！

冴子、奥の間(出てきた上手ソデ)をしきりに気にする。

泰星 酒屋の角の公衆電話やで。

冴子 酒屋の角…。泰星、時間潰してから帰ってきてちょうだい。ええな？
…はい。

冴子、慌てて電話を切り、上手へ小走りにはける。

効果音・ガチャリ、という公衆電話の受話器を置く音。

それと同時に、電話は終わってスポットは消え、照明は全灯へ戻る。

眞名 冴子さん、なんて？

気持ち、弾んだ様子の眞名。

泰星、それを見てわざとらしく明るく嘘を並べる。

泰星 いまスッピンやから、化粧する時間が欲しいってさ！

眞名 はは！ これから家に帰るだけなんやから、わざわざ化粧なんてしなくてええのに。

泰星 カレシの前では、いつでも綺麗な姿でいたいんやない？

眞名 いやあー、参ったなあ。

ほら、母さん、眞名よりだいぶ年上やしね！ 化粧でお肌の年齢、誤魔化してんやで。

眞名
泰星
眞名

あ、お前、失礼なこというな！ 冴子さんはまだ二十代やぞ！
でも怒ったら、こーんな顔してシワが物凄く増えるで！
言つたな？！ 待て、こら！

ふたり、きやつきやとはしゃいで駆け回る。

一段落したところで、眞名が待っていたかのように切り替える。

眞名

さつ、そろそろ帰ろっか！

泰星

あー！ ちょっと待って！ まだ着替えが…

眞名

着替え？

泰星

いや、違つた、こつちの話。…着替えやなくなつて、化粧が！ まだ、だから…。

眞名

そうか。冴子さん、化粧に時間掛ける人やつけ？

泰星

掛けるねえ！ 三十分、いや、一時間くらい掛けるかも…

眞名

どこ出掛ける気やねん？！ 止めにいこう！ 無駄やから、今すぐ帰って止めにいこう！

走り出そうとする眞名を、泰星は両手で掴んで必死に止める。

泰星

あかんー！ あかんつて眞名！ 約束を破つて襖を開けてしもうたら、正体がバレた鶴は怒つて戻つてこえへんくなつてまうんやで！

眞名

なんや、その諭え？

泰星

「鶴の恩返し」や！

眞名

化粧で化けてる間は、家に入るな、つて意味？

泰星

厳密に言うとは違ふけど…ま、そーゆーこと！

眞名

なんやねん、その含み。余計気になるわ…

泰星

あ、せや！ 眞名、前に絵描いてたやん！ あれ、おれにも教えてや！

眞名

調子ええなあ、お前。将来、世渡り上手になりそうやな…

泰星

ほら、眞名！ 早くこつち来てやー！

泰星、舞台センターより下手寄りに座り込み、隣をばんばん叩いて眞名が座るのを待っている。

眞名、諦めて笑いながら隣りに腰を降ろし、リュックから画用紙などを取り出してふたりで見えるように持つ。

眞名

何がええ？

泰星

えつとなー、えつとなー…じゃあ、おれ！

眞名

えー、泰星？ 人物画、苦手なんやけどなあ。

眞名
牙子

今日、何食べたい？
あ、おれ天ぷら！

眞名
泰星

クラスの女の子にモテモテで、カッコいいタイセイくんを描いてな♪
うーん、難しい注文やなあ！ お兄さん、不器用やから真実しか描けないんだ
ー♪

ふたり、雑談や歌謡曲の鼻歌を唄いじゃれ合いながらお絵かき。
いい頃合いで、音楽③がフェードイン。

眞名・泰星、パントマイムで絵を片付け、再びお家に向かう帰路になる。半周して下手へ差し掛かる頃、上手ソデより、牙子登場。

服装等は普段着になっていて、わざとらしく身なりを整える仕草。
家に到着し、玄関に來たふたり。

音楽、ボリュウムダウンして、そのままBGMになる。

眞名・眞名
牙子

ただいま。
おかえりー。

牙子、泰星にも眞名にも平等の表情。しかし直ぐに、眞名に駆け寄る。
リュックを降ろして手で持っていた眞名、牙子は自然にその荷物を受け取る。

眞名
牙子

眞名、いつもありがと。泰星のお迎え、行ってもらっちゃって…
そんな、ぜんぜん！ オレ、学生で暇やし！ 子供大好きやし！ 気にせんとして！ それに、オレが牙子さんの力になれることって、こんくらいしかないから…。

眞名
牙子

何言ってるの、充分よ。ほんま、助かってる。感謝してるんよ。
…う、うん。

眞名、テレを隠して言葉に詰まる。

そんなふたりを帰宅後の片付けをしながら割りと眺めていた泰星、わざとらしく肩を竦めて見せる。「やれやれ、ふたりの世界に入っちゃって…」みたいなノリで。）

しかし、牙子も眞名も「恋人」の肩書きの割にはあまりべたべたした雰囲気は無く、姉と弟みたいなノリで、少しふたりの間に距離感がある。

眞名

何でもええよ、冴子さんの手料理なら。

泰星

天。ふら！

冴子

もう、なんでもいい、が一番困るの！　なんかリクエストして？

泰星

天。ふら。

眞名

…………じゃあ、カレー。

泰星

肉じゃが！

冴子

判った。今夜はカレーにするわ。

泰星の声は届かないふたりの世界に入ってしまったている冴子・眞名。

会話をにこやかに微笑ましくしながら、上手へはけていく。

それを突っ立って見送ることしか出来ない泰星、舞台上にひとりぽつん、と取り残される。

泰星、暫くの間あと、力なく呟く。

泰星

じゃあ、おれもカレー…………。

若干の間あと、BGMで流れていた音楽③、ボリュームアップ。

照明、フェードアウト。

暗転。

場面は、クレナイと青の夕方の港に戻る。

効果音・港の音がフェードイン。(BGMになる)

照明、フェードインでブルーになる。

舞台には最初と同じ配置で、上手側にクレナイ、下手側に青がいる。

重なって流れていた音楽③、照明の後にフェードアウト。

青

ふーん。なんか、微笑ましい話だね。すきな女の人のために学校サボって、生意気なガキんちよの世話して？

クレナイ

そうそう。

青

バイト代もつぎ込んで、心身ともに貢いでたわけだねー。

クレナイ

ま、そーなる……かな。

青

そのおねーさんとは、身体の関係もあつたんだよねえ？

クレナイ

から……！ ま、まあな。

青

で？ で？ そのレンアイはその後どーなったの？

クレナイ

オレが妻子持ちに見えるか？

青

全然。

クレナイ

そーゆうこと。

青

振られちゃった、ってわけね。

クレナイ

ちよつと待て！ なんや、その決め付けは？！ 「別れた」ってニュアンスは漂わせ

青

たけど、「振られた」とは一言も言ってるんで！

青

えー？ だって、どーせ振られたんでしょ？

クレナイ、暫く苦い顔で青を見る。

クレナイ

振られたわけやない。正確には。

青

なに意地張ってるの？ 悪足掻きはみつともないよ？

言葉と同時に、舞台上に冴子が下手より、村崎は上手より、向かい合わせに入ってくる。(サブステージ的な)

舞台中央で周りの照明が薄暗く落ち、冴子・村崎にスポットが当たる。溜め息をつく冴子。冴子・村崎、判りやすいノリとテンションで演じる。

冴子

うち、母親失格やわ……。

村崎

何言ってるんだ。キミはよくやってるよ。

冴子 村崎さん……………！

見詰め合うふたり。ストップモーション。

青 だれ？ あの男は。

クレナイ 聞いている通り、「ムラサキさん」や……………。

青 意味わかんないし！

遠い目をして言うクレナイに、青は苛立って返す。

クレナイ、すぐに現実に戻ってきて状況を見据える。

クレナイ つまり、彼女にはもうひとり、オトコが居ったんや。

青 え、マジで？…

村崎 そんなキミを、俺は一生守っていく！

セリフと同時に指輪の箱を出して開けてみせる村崎。

冴子 これは、エンゲージ・リング！

冴子・村崎、再びストップモーション。

青 あーあ、プロポーズしちゃった。先、越されたね、マナくん。

クレナイ 相手は大人の男、対してこっちは未成年の高校生。現実を見据えた時、適うわけが無かったんやろーなあ……………。

青 切ないね……………。

そう、切なかった。そして、もうひとり切ない思いをした男が居ったんや。

冴子・村崎、少し場面が変わって。(時間が経過して)

冴子 どうやって言えば伝わるんやろか。どうやって言えば、判ってもらえるん？

村崎 ……………誰も傷付かない方法なんて、無いんだよ、冴子。

冴子 確かに、うちが悪かったんよ。でも、あの子には何度も伝えてきたんよ？ 何度も、何度も……………！

村崎 冴子！ 落ち着いて！

頭を掻き毟るなど激しい動きをして今にも暴れだしそうな冴子。村崎、駆け寄

って抱き寄せる。村崎の腕の中で、段々、落ち着いてくる冴子。
泰星、冴子が暴れだす辺りから入ってきて隅で声を殺している。

村崎

あのガキ……！ 冴子をこんなに悩ませて……。子供だからって、何しても許されるわけじゃねえぞ！

泰星にスポットが降りる。泣き出しそうなのを堪えている。

クレナイ

彼は、この家の中には、自分の居場所がないと確信した。切なくて、切なくて。夜の街を走った。もちろん、5歳児の行くアテなんてそんなにあらへん。彼の目指した場所は、当然のようにここやったわけ。

クレナイの解説にあわせて、泰星は走る。そうしているうちに冴子・村崎も走り抜けてサブステージの場面が変わる。
蹲ってじっとしている泰星。

クレナイ、その場に立ったまま、真名の声になる。

真名

泰星？ どないしたんや、こんな時間にやってきて。

泰星、誰も居ない正面の空間に向かってはっと顔を上げる。そこに、真名がいる。
てい。

真名

家に戻らんと、冴子さんが心配してるでー。

泰星

心配なんて！ してへんよ……。

真名

……泰星？

泰星

だって、母さん。おれのこと、嫌いやもん。

セリフと同時に泰星のスポットが消える。

真名、目を見張って泰星を見る。何かを言おうとしたけど、言葉を詰まらせる。

泰星、青のセリフが始まったら、とぼとぼ歩きながら下手にはけていく。

青

慰めてあげなかったの？

クレナイ

何も言えなかった。こんなときに出る言葉は、気休めやって知ってるから。

青

ふーん……。タイセイくん、随分マセガキだったみたいだもんね。

クレナイ

マセガキって。

青

で？ どうやって振られてしまったの？

クレナイ

まだ引つ張るんか、「振られた」話題。

青

当たり前じゃない！ アンタの恋愛ストーリーは最後まで聞いておきたいの！

クレナイ、再び苦い顔で青を見る。

クレナイ

ま、終焉を迎えたわ。…最悪の、形だな。

音楽④、フェードイン。

効果音・港の音(BGMとして流れていた)、止まる。

照明、少し落ちて薄暗くなる。

クレナイ・青、お互いに視線を向けたままストップ。

クレナイのセリフの終了と同時に、上手から冴子、下手から泰星が出てきて、二人は同じタイミングで音楽の調子に合わせて小道具をセットする。そしてそのまま冴子と泰星は演技に入る。

クレナイ・青、そのまま音楽に合わせて動き(歩き)、互いに交差してソデにはける。

音楽④、フェードアウト。

泰星の鼻歌。

照明、フェードインで全灯。

上手に冴子、下手に泰星で、オープニング時と同じ雰囲気。机と椅子が置かれており、泰星が机に向かってお絵かきを、冴子はお出掛け前の身支度をしている。

泰星
できた！　なあ母さん、見てこれ！

泰星、描きあがった絵を冴子に見せる。

冴子、余り関心なさそうにちらっとだけ目をやる。

冴子
なんや？　それ。

泰星
トラやつて！　今年は絶対阪神優勝するね！

冴子
野球はどーでもええんやけど……。トラやったら、もっと厳つく描かんと。

泰星
これは敢えてやて！　そんなリアリティ求めてへんの！

冴子
あ、そう。なら意見なんて仰がんとって。

泰星、膨れっ面で不満げな顔。しゅしゅ絵を下げる。

冴子
あんた最近、お絵かきばっかりしてるなあ。

泰星
うん、あんな、真名にいろいろ教えてもらってん！

冴子
真名に？

泰星
そう。母さん知らんの？　真名、ごっつ絵が上手なんやで！

冴子
ふーん。どっちでもええけど、子供は家の中ばっかで遊んでんと、外に出てきなさいな。

泰星
外行っても、誰も居らんもん。

小さくコチる泰星。冴子、それには反応しない。冴子、忙しそうに動き回り出掛ける準備をする。

泰星、わざとらしく大きな声を出す。

泰星
ねえ、今日って何の日でしょう？

冴子
煩いわね、大きな声出して！　忙しいんやから、静かにして頂戴。

オープニングと同じ場面になる。

泰星、冴子を無視して昭和五十九年ごろに流行った歌謡曲を鼻歌で口ずさみながら、絵を描いている。

冴子

泰星、ちよつと泰星！ 退きなさい。お母さんもうすぐ出掛けんとあかんねんから……。

泰星

え？！ ご飯は？ お腹減ったあー！

泰星、冴子に席を譲りながら膨れっ面をする。

冴子、身支度に急いでいるためイライラした表情をしながらもそれを抑えて、素早くサイフから五百円紙幣を一枚抜き出して泰星に押し付けるように渡す。

冴子

はい、五百円。こんだけあったら、そのホカ弁でお弁当とジュースくらい充分買えるやろ。

泰星

えー……またお弁当？

冴子

文句言わへんの。お母さん、忙しいんやから。毎日あんたのために働いてるんですよ。明日のご飯、食べられんくなってもええの？！

泰星

……。

冴子

ゴミはちゃんとペランダのゴミ箱に捨てるんよ、いい？ 家の中に置いておいたら、すぐゴキブリが出るんやからね。判った？

泰星

……はい。ねえ、今日は誰に会いに行くの？

冴子

何言ってるんの、仕事や。お客さんのとこに行くの！

泰星

真名じゃないね。

冴子

はあ？

冴子、睨むようにして泰星に振り向く。

泰星

……母さん。

冴子

なによ？

泰星

母さんの好きな人って、誰？ 村崎のオジサン？

冴子、暫く口を噤んで泰星を睨む。泰星も負けじと視線を外さない。泰星、「村崎さん」に反感を持っている様子。

泰星

村崎さんと、結婚するつもりなんやろ。おれは――

冴子

ひとつ言っておくけど、これはうちの問題やの！ アンタやなくて、お母さんの人生なんよ。誰と結婚するんか決めるんは、息子のあんたやなくて、お母

さんの！

泰星

判ってるよ！でも、おれ、村崎さんとは……上手くやっていく自信、無いわ……。あの人、子供ギライやし、きつとおれ、苛められる……。

冴子

大丈夫や。結婚が決まったら、あんたは国のお祖母ちゃんのとこに預けるから。

泰星

え……？

冴子

泰星に取ったら、ひいおばあちゃんになるわな。蔚山（ウルサン）に住んでるんよ。釜山（プサン）の北にある町。結構都会やし、ええとこやで。

泰星

ちよつと待って。それ、どういう意味？日本から出て行け、ってこと？

冴子

なに日本人みたいなこと言ってるんよ。ええやん、祖国に帰れば。あんたは立派な韓国籍なんやから。

泰星

何、それ……。祖国なんていわれても、おれは日本で生まれたんやし、そもそも日本語しか話されへんわ。

冴子

あー、それは大丈夫やって。おばあちゃんは日本語喋れるし、あんたやってまだ小学校行く前なんやから、言葉なんて直ぐに覚えられるわ。

泰星

そういう問題やない！厭や！

冴子

あら、国に帰れば、面倒臭い問題も無くなるで？小学校に上がるときに使う名前、「くれ・たいせい」か「オ・テシン」か。もう迷わんくって済むんやない？

冴子のセリフの後、間髪を居れずに家の呼び鈴（ブザー）が鳴る。

立ち尽くす泰星をすり抜け、「はいー」と言いながら下手側の玄関に向かう冴子。

効果音・ドアの開く音、冴子の動作に合わせて。

下手のソデから登場した村崎、玄関に上がり入ってくる。

村崎

よかった、まだ出掛ける前で。

冴子

どうしたんですか、村崎さん 待ち合わせは5時にツインタワーのロビーやったはず……

村崎

うん、そうなんだけど、やっぱり冴子が出掛ける前にどうしても渡しておきたいものがあつて。

冴子

え？ 渡しておきたいものって……？

冴子と村崎、恋人同士の甘い雰囲気を漂わせつつ、泰星が傍にすることに気付かず完全にふたりの世界に入っている。

村崎、ポケットからリングの箱を取り出す。

これ。

まあ……！

村崎 スカイレストランで渡しても良かったんだけどね。折角だから、早く嵌めておい
て欲しくって。——うん、今度はピッタリだ。

村崎、言いながら冴子の手をやさしく取り薬指にリングを嵌めてあげながら言
う。そしてイタズラにニヤリと笑って。

村崎 これで、キミは正式に俺のもの。——…なんて、ちよつと独占欲出しすぎか
な？

冴子 ふふっ。ありがとうございます。とっても嬉しいです。

村崎 よかった。なんせ、冴子にはライバルが多いからなあ。キミのおませなボウヤ
に、あの生意気な——

振り向いた村崎、ふと傍にいた泰星と目が合い、驚いて飛び退く。

村崎 うわっ、クソガキ!？

泰星 ………こんには。

村崎 な、なんだよ、いたのかよ?!

冴子 た、泰星!! まだ家の中に居ったん?! あんたは早よお外で遊んできなさ
い!! お、お友達が待つてるやろ?!

村崎、かなり動揺し、不機嫌そうに泰星を邪魔者の存在としてあしらう。同
じく冴子も動揺して取り乱してしまう。

村崎 さ、冴子、前にほら、学生の実家庭教師を雇ったとか言ってたか? ほら、

えーっと、なんて言ったかな……えーっと……!

泰星 ……もしかして、真名のこと?!

村崎、機転を聞かせて言ったつもりだが、泰星は逆にますます不機嫌になり怪
訝な眼差しを村崎に向ける。村崎はささこの場をやり過ぎたがために
適当に話を続けている風。

冴子、真名の名を聞いて、複雑な心境に。

村崎 そんな名前だっけ? まあ、兎に角そいつ! ボーズ、お前そいつと仲いいんだ
ろ? 今日は来てないのか?

泰星 来るわけ無いやん。母さん、今日はオジサンと会う予定やったんやろ?

冴子 泰星!

冴子、足早に駆け寄り泰星を打つ。効果音。

泰星、暫くの間のあと、はっとした顔で冴子を振り返る。

冴子 あんた、誰に向かって口利いてるの?! 謝りなさい、今すぐ村崎さんに謝りなさい!

冴子を見上げる泰星の表情、睨むような表情に変わる。

村崎

まあ、そう熱くなるな。時間が勿体無い。こうしている間だって、貴重な冴子と過ごす時間なんだから。ガキに邪魔されたくないんだ。その家庭教師のマナッてやつに連れて行ってもらえよ。冴子、連絡は取れないのか?

冴子 やめて! 連絡先は知らんよ……! 彼は……紺野くんは、いつも泰星を連れてきてただけ。うちから誘ったことは一度もないの! 連絡先なんて……! どうしてそんなことうちに聞くんですか?!

冴子、浮気を疑われている気分になって取り乱す。

泰星、睨んでいた鋭い目付きが、段々泣き顔に変わっていく。

下手より、嬉しそうな表情で眞名が登場。手にはプレゼントの包みを抱えている。それを眺めては、にににとして、徳山家の玄関へ向かう。

村崎

落ち着けて、冴子。何もキミを責めてるわけじゃない。

冴子

判ってる、判ってるんよ。泰星、お願いやから早くして! 早く出てって! これ以上、お母さんを困らせんといて!

泰星、泣くのを堪えて静かに、でも勢いよく玄関(下手)に向かって駆け出す。

玄関先で、飛び出してきた泰星と、呼び鈴を鳴らそうと突っ立っていた眞名、勢いよくぶつかり、泰星は後方へ尻餅を着く。

眞名

わっ! だ、大丈夫かよ?

泰星

眞名………!

冴子

うそ……何で?

眞名、転んだ泰星に手を貸して、立ち上がらせてやる。

冴子

紺野くん……どうして此处へ……?

冴子、苛立ちと不安を押し殺したような声。

それには気付かない真名、慌てて包みを背中に回し、いつも通り明るく振舞う。

真名

あ、冴子さん！ 突然押しかけちゃってごめんなさい。でも今日は、どうしても驚かせたくって、黙っとってん。

冴子

…何の話？

真名

んーっとね、実は、今日はプレゼントを持ってきました！ じゃん！

真名、みんなに見せるように、背中に回していた包みを前面に押し出す。

村崎・冴子、それを見てちよつと顔をこわばらせる。村崎、彼に詰め寄ろうと一歩前へ出る。

そんな反応には気付かない真名、ひとり続ける。

真名

いま世間を賑わすファミリィ・コンピューター！ 略してファミコン！ 泰星、6歳の誕生日、おめでとー！

泰星

え…。おれに…？

真名、包みを泰星に手渡し、派手に拍手しだす。予想外の展開に驚きながらも感動して泣きそうになる泰星。

冴子

やだ…今日やったん？！

泰星の誕生日に気付いていなかった冴子、ニミで気付いてはつとなる。

泰星

ううー…。真名あ、ありがとお。これ、すんごい高かったんやないの…？

真名

子供はそんな心配しなくてええから！ 素直に喜んできなさい！

泰星

でもおー…。真名が万引きとか…強盗とか…やってないか心配で…

真名

そつちかいっ！…！ “心配なく！ それはセンパイから安く譲り受けたもんやから。

泰星に向かっていた真名、冴子の方に視線を切り替えて身振り手ぶりで明るく話す。

真名

あ、冴子さん冴子さん、知ってる？ これ。家庭用カセット式ビデオゲームって言うてな、テレビに繋げてふたり以上で楽しめるゲーム機なんやって。案外、大人もはまっちゃみたいよ…

真名、冴子の背後に村崎の姿を認めて語尾が段々小さくなっていく。

啞然として村崎から目が離せなくなる眞名。村崎も睨むように眞名を見続けている。

ふたりの間で、ただおろおろするしか出来ない冴子。

泰星、プレゼントを抱えたまま眞名の背後に身を隠すように回り込む。

村崎 キミが、コンノマナくん？

眞名 え？ えつと……あなたは……？

村崎 私は冴子さんの婚約者の村崎務だ。

眞名 えつ、こつ、婚約者……

村崎 キミの話は聞いているよ。よく泰星くんの面倒を見てくれているそうじゃないか。

眞名 彼女も、無論、私も感謝しているよ。いい家庭教師を雇ったってね。

村崎 か、家庭教師？！ オレが？！

眞名 何だ？ 違うのか？ ベビーシッターだったかな？

冴子 ……冴子さん、これ、どーいうこと……？

眞名 ……。

冴子 オレは、ベビーシッターやったん？

冴子、眞名から視線をそらし、口をへ字に噤んで黙ったままで居る。

眞名 なあ冴子さん、オレは冴子さんにとって、ただのベビーシッターやったん？ な

あ。何とか言ってや、冴子さん……！

眞名の顔が見れず、村崎の横顔をちらりと見る冴子。村崎は眞名を牽制するように見続けている。冴子、苦しい気持ちながら腹を括って言い放つ。

冴子 ……そうや。

目を見開き、唇を噛み締める眞名。

次の瞬間、踵を返して勢よく玄関から飛び出し走り去る。

同時に激しくも哀しい音楽が流れ出す。

泰星

眞名！

泰星、眞名がはけてから直ぐに後を追って走って追いかけていく。

冴子、複雑な心境でふたりが出て行った玄関を眺めている。

村崎、彼女の肩に手を乗せ、ちらりと振り返った冴子に向かって目を瞑って首をふる。視線を落とす冴子。村崎、冴子の肩を抱いて、奥の間（上手）へはける。

その間、冴子はちらちらと何度か後ろ髪を引かれるように玄関側を振り返りながらソデに入っていく。

音楽がポリュウムアップし、照明が切り替わる。

下手から眞名が飛び出し暫く走った様子でやがて中央で力尽きたようにとぼとぼと歩き出す。

それを追って走ってきた泰星、歩いている眞名に追いつく。

音楽のポリュウムが下がり、そのままBGMになる。

泰星

眞名……

掛ける言葉が見付からない泰星。眞名も答える言葉が無く、そのままとぼとぼと進んでいる。

泰星

大丈夫？

答えはなく、暫く沈黙で歩き続けるふたり。

眞名、急に独り言のように小さめに喋り出す。

眞名

お前も、淋しかったんやな。

泰星

え？

よく聞こえず、首を傾げて立ち止まる泰星。

眞名

そーや。オレとお前は似たもの同士やったんや。

尚もつぶやく眞名。

小さく歩きながら一周して泰星と向き合う眞名。

暫く互いに見詰め合うふたり。

そして眞名は勢いよく泰星に膝を着いて抱きつく。手が離れてしまわないように掴みなおすように、きつく、きつく。

泰星

だから、前に言っただん。「後悔するで」って。

眞名

……ああ。

泰星

……ねえ。母さんにも、こうしてた？

眞名

ああ。

眞名、頷く。顔を上げず、何度も頷く。そして。今度ははっきりと声を出す。

眞名

お前は、オレの、合わせ鏡やったんやな…。

その言葉を聞いた瞬間、泰星が声を上げて泣き始める。嗚咽を漏らすように、我慢する声が漏れるように泣く。

泰星

うっ、うっ、うえっ…！

BGM音楽、再びボリュームアップし、嗚咽をかき消す。

音楽と反比例するように照明フェードアウトで真っ暗になる。

音楽フェードアウト、重なるように港の音の効果音入ってくる。そのままBGMに。

照明、フェードインでブルーになる。

上手側にクレナイ、下手側に青がいる。

クレナイ

オレと……泰星とは、似たもの同士やったんや。……冴子さんに構ってもらえへん、相手にされていへん者同士。オレが、普段から泰星に構ったのは、まるで自分を見るようで放つとかれへんかったんやろーな、きつと……。

青
ふーん。「最悪の終焉」ねえ。……確かに、相手のオトコと鉢合わせ、なんて超修羅場じゃん。

クレナイ

やろ？

青

……そんな時、クレナイはどう思ったの？

クレナイ

へ？

青

彼女のこと。だって彼女、あんたには婚約者が居ることを隠して、婚約者にはあんたのことを息子の世話をしてくれるベビーシッターだって言って、それまで誤魔化してたわけでしょう？ 相手の男と鉢合わせした後、逃げ出した先で落ち着いてから、彼女のことどう思ったの？ 裏切り者だと思って熱が冷めた？ それとも、何かワケがあると思いいなおしてもう一度彼女に会って話を聞いてみようと思った？

クレナイ

それは……まあ、裏切られたと思ったよ。オレは婚約者の存在なんて、知らなかったわけやから……。

青

ふーん。じゃ、冷めちゃったわけだ。

クレナイ

まあ、そーいう、ことになるかなつ。

青

それから、もう彼女に会わなかったの？

クレナイ

ああ、会ってへんよ。

青

タイセイくんのお迎えは？

クレナイ

行くわけないやん、裏切られて振られた女の息子やで？

青

——嘘つ。

青、ずっと本当の答えを探り出そうと詰問調で喋っていたが、クレナイが同じ調子で誤魔化し続ける気なので強い言葉で一旦区切る。

なんだか面食らったクレナイ、きょとんとして、ふたりは互いを見遣ったまま沈黙。

クレナイ

…何やねん、お前。オレの答えが不満なわけ？

青

当たり前じゃん。だってクレナイ、嘘ばっか吐くんだもん。

クレナイ

う、嘘ちやうわ。あ！ 判った、冷たい、って言いたいんやろ？ それかアレや、息子は関係ないじゃん、か？ でもオレも仏サマとちやうんやうなことよ、そんなに心広くないの。この恋はコレで全て終わり！ 辛く哀しい失恋の想い出ってことや。だから最初に言ったやろ？ オレ、女と子供は苦手やつて。

——これで満足か？

青

でもそれだとちよつとおかしくない？

得意げにまくし立てたクレナイ、満足して話を切ったつもりが、青が全くその話を聞いていなかったかのように先ほどまでと同じ調子で言葉を続けたため、大きく拍子抜けした声が出る。

クレナイ

何が？

青

だって、まずタイセイくんはお母さんが二股掛けていることは知ってたわけでしょう？ いくら隠してたって、子供の嘘を見抜けないわけじゃないと思うんだよね。…：…婚約者も、それに、マナくんも。

青、「マナくん」というところでクレナイを振り返ってじっと目を見る。
疑われているクレナイ、目を細めて。

クレナイ

…：何か言いたそうやな。ってか、何が言いたい？

青

アンタ、「マナくん」じゃないね。

ずばり言い当てる青。クレナイ、動揺を取り繕った冷静さで隠そうとする。

クレナイ

…：まあええわ。で、オレが眞名やないとして、何でそう思うん？ まさか、女の二股がバレた時のオレの薄情な対応や、なんて言わんよな？

青

まさか！ 違うわよ。あんたの作り話には、大きなミスがいくつかあるってこと！ まず、時代背景！ クレナイ、あんた今いくつよ？

クレナイ

…：もうすぐ三十路やけど。

青

つてことは今二十九でしょ、話の中のマナくんはあたしと同じ高校生だからせいぜい十六、七。若く見積もっても十五だから、今から十五年前の話ってことよねえ？

クレナイ

ああ。それが？

青

あんた、その頃あたしがまだ赤ちゃんだったからって、ナメてるでしょ。はあ？

青

まず！ 当時流行ってたゲーム機はプレステⅡやXBOX！ アニメはコナンやワンピース！ いくらタイセイくんがマセガキだったとしても、タッチやみゆきの主題歌なんて鼻歌で歌わないでしょ。それにファミコンって！ どんだけ時代錯誤なプレゼントよ。しかもそれに対して誰も彼に突っ込んでないし！ おかしいでしょ。

クレナイ

……お前……意外と細かいな。ってか知りすぎやろ……。

青

観察力豊かだつて言つて。——まだまだあるわよ。タイセイくんは公衆電話からお母さんに電話を掛けてるよね、流石に5歳児に携帯電話を買い与えてないにしても、高校生だったアンタやましてや大人のサエコさん、誰も持ってなかったの？ 当時のPHSや携帯電話普及率、何パーセントだと思つてんのよ？

クレナイ

……二十パーセントくらいか？

青

二十四・九パーセント。

クレナイ

細かつ！ 何のマニア情報やねんっ？！

青

約二十五パーセントつて言つたら、4人にひとりを持つてる計算になるよね。それにこの数値は世帯別調査だから高齢者や子供も含まれてる……となると、高校生や大の大人が話しに出てきて、誰も携帯電話を使つてるシーンがないなんて、ちょっと不自然じゃない？

クレナイ

そ、そんなことあらへん！ たまたまやつて、たまたま！ 当時は今みたいに誰もが当たり前に持つてるわけやなかったんやから！ ま、現代人のお前にはケータイデデンワが無い世界なんて、想像もつかへんのもしれんけどな。

青

まあ、いいわ。そーゆうことにしておきましょう。それよりも、もっと重大なミスがこの話にはあるんだから……。

クレナイ

お前、いま推理ドラマの探偵の気分浸つてるやろ？

ちよこちよこ入るクレナイのツツコミには耳も貸さない青、真剣に推理を続けて

いる。腕を組んで背を向けていた青、突如振り返って人差し指を指す。

青

ずばり……！

クレナイ

ずばり？

青

登場人物の服装が八十年代風！ つか八十年代そのもの！ ——ねえ、コレって脚本家や演出者の趣味？

ちよつと芝居からハズレだすふたり。

クレナイ

オレ、語りの中で細かい服装描写まで言つてへんねんけど……。

青

でも事実じゃん！ だってあんな気取つてたムラサキさんが、シャツをズボンにインだよ？！ あたしだったら惚れないね。

クレナイ

服装で男を判断すんな！ 当時はあれが流行やったんやって！

青

あ、またウソ吐いた！ あたしが知らないと思って！

クレナイ

じゃあ、村崎さんのセンスの問題！

青

「じゃあ」って何よ、さっきと意見曲げてるし！

クレナイ

じゃあ！ あ、また言ってもーた、えーとなあ、えーっと…

息を切らすふたり。話が元に戻って。

青

もういいよ。——あたしが本当に見つけた決定的な証拠、それは…！

クレナイ

……それは？

青

五百円札よ！

クレナイ、あとという口を開けたが声が出ず、しまった、という表情になる。
対して、勝ち誇った表情になる青。

青

最初の五百円硬貨が発行されだしてから約三十年。五百円紙幣の生産が終わったのは1985年、そこから約8年間は日本銀行からの払い出しがされてたみたいだけど、実質的流通枚数は遥かに硬貨の方が上回っていたはず…。

クレナイ

お前…何の役にも立たへん予備知識豊富すぎやろ。こーゆう輩に限って学校の勉強はてんで出来なかったりするんやから、面白いよなー。

青

なんか言った？

クレナイ

いえ。続けてください。

また話が脱線しかけるが、直ぐに戻って。

青

(咳払い)、ま、そーいうことよ。この想い出エピソードは十五年前のものなんかじゃない。本当は二十五年前のもの。違う？

答えないクレナイ。ちらりと彼の反応を確認するが、気にせず続ける青。

青

つまり、あんたの正体は、紺野真名ではなっくって、呉泰星(くれたいせい)なんですよ？

自信たっぷりと言う青を暫く見つめていたが、観念したクレナイ。

クレナイ

降参！ 参ったわ、恐れ入りました。

青

あはっ！ やっと本当のこと言った！

青、推理モードを解いて急に無邪気な女子高生に戻る。

クレナイ

アカンなー、オレ。ほんま、話すのが下手糞で。今回で思い知ったわ。

青

でもこれが、女と子供が苦手になった原因だったのは、嘘じゃないんでしょ？

クレナイ

そーやな。オレは眞名と仲良かった分、彼に感情移入して見てた部分も多少なりとはあるから……。自分の母親とはいえ、オンナって恐れ、って思ったし、それらを見ながらも平然と中心に身を置いてた自分自身にも吐き気がしたから、コトモも苦手なんよ。

青

ふーん……。ところでさ、クレナイ。なんかさつきから、お尻が軽いなーなんて、思わない？

クレナイ

は？ 何やねん、急に。こーいう時はケツやなくて「胸がすっきりした？」とか言うんやで？

青

違うよ！

呆れながらも大笑いしながら否定する青。

青

あんた、本当にあたしが話だけ聞いて時代背景のミスや嘘に気付いたと思う？

クレナイ

何やねん……まだなんかカラクリがあるんか？

青

フン……！ さあ、あたしの得意分野はなんでしよう？！

クレナイ

得意分野？ ……逃げ足が速いこと？ 万引き……あつ！

クレナイ、はっと気付いて慌てて自分の尻ポケットを探る。

クレナイ

無い！ オレのサイフ！

青

じゃん！ 気付くのが遅いね、兄サンっ！ そんなトロかったら、世の中渡っていかないよ？

青、スっていたクレナイのサイフを目の前に突き出して掲げる。そして指をスライドさせて、中の証明書を少し抜き出し、読み上げる。

青

オ・テシン。国籍、大韓民国。生年月日、一九八〇年〇月×日……

クレナイ、青が読み上げてる途中で、直ぐにそれらをひったくるように奪い返して。

クレナイ

なんや、そーか！ サイフの中の免許証や外国人登録証明書、見とったんや

な？！

青 当たり前じゃーん。身元調査はキホンだよ、基本。いくらあたしでも、正体不明の男の部屋に泊まるのは恐いもんっ！

クレナイ ああ、神待ち掲示板の書き込み？ そんなにしたって結局はやるんやろ？ 変わらへんわ。

青 バカ！ 気持ちの問題なの！

クレナイ ひいふうみい……よし！ 財布の中身は減つとらんな。

青 ちよっと！ あたしのこと疑ってんの？！ いくらなんでもアンタのサイフから盗ろうなんて思わないわよ！

クレナイ そりゃそーか……。大の大人の所持金が三十円ぽっちゃあな……。
青 気の毒で……。

沈んだ様子のふたり。

クレナイ、その陰鬱な空気を取っ払うかのようにそそくさと財布をしまい、明るく切り出す。

クレナイ ま！ それにしても、青のお陰で懐かしいこと思い出したなあ……。眞名にはいつも迎えに来てもらって、よお母さんと三人で一緒に飯食ってたわ……。オレが絵描くようになったんも、眞名の影響やしな。

クレナイ、スケッチブックを取り出してそれを指し示しながら。

青 そつか。確かに絵は上手だね……。あ！ ねえ、幼稚園のお迎えってさ、サエコさんが来ることは無かったの？

クレナイ 母さんが？ ……あつたかもしれへんけど、記憶には無いな……。基本的に眞名と一緒に帰ってたイメージが強いし……。

青 いつも？

クレナイ そう、毎回。

青 ……マナくんって、随分、律儀な性格だったんだね。

クレナイ そーか？

青 そーよ！ だって、小さい子供が家に居たら、外でのデートなんて殆ど叶わないわけでしょ？ ご飯だっていつも三人なわけだし。そうやって大して相手にしてもらってない女の人に会うために、子供のお迎え毎日行くな……。あたしだったら、耐えられない。

クレナイ まあ、ヤツも子供すきやつたし、苦には成らんかったみたいやけどな。

青 でも、本当にそうだったのかな？

クレナイ なんや、どういう意味やねん？

青

……マナくんは、本当に子供が好きだったのかな？ ムラサキさんは子供ギライなのにサエコさんにプロポーズしたのかな？ そんなムラサキさんと一緒にするためにお母さんは行ったことも無い祖国の親戚の家にクレナイを預けようとしたのかな？

クレナイ

……サエコさんは本当に、タイセイくんを邪険にしていたのかな？

んー、まあ、そんなもんなんとなっちゃう？ 恋をしたら人は常識なんて吹っ飛ばせるくらい盲目になれるんねんから。

青

確かにそうかもしれないけど……でも、子供時代の記憶は時に曖昧で、自分の都合や、希望や、時には夢の中の出来事さえも、真実の出来事として記憶に残ってしまうものなんだよ。

クレナイ

どないしたんや、急に。

青

だって、あたしがそうだったから。

クレナイ

お前が？

青

青、静かに頷く。そして、はっきりとクレナイと、観客に向かって言い放つ。

真実の出来事は、案外、逆だったりするんだよ。

暗転。

青・桃江・緑川が舞台に居る。場面はへぐの後半。抱き合っている桃江に緑川。ふたりから隠れるようにしてそれを見ないようにしている青。
緑川の手つきがエスカレートしそうになる。桃江、慌ててそれを止めようとする。

桃江

…あ、ちよつと、待つて。まだ奥に青がいるの。

緑川

別にいいじゃないか。いや、むしろちよつといい。

桃江

え？ どういうこと？

緑川

次は、青に相手をさせてくれよ。

桃江

…………え？

緑川

一度、女子高生を抱いてみたかったんだよなあ。な、いいだろ？

硬直し、言葉を失う桃江。青も同時に驚いて緑川を見遣る。

緑川

なあ桃江。聞いてんのか？

桃江、静かに緑川の手から少し離れる。

緑川のアツが無かつたことに失望し、同時に自分が求められることは無く、彼の興味の対象が娘に移つたことに対してショックを受ける。

桃江

あたしを愛してくれていたわけじゃなかつたのね…。

緑川

は？ 何？

桃江

あの子には……！ 手を出さないでよ…………。

緑川

妬いてんの？

桃江

ふざけないで！ あの子はまだ十六なのよ？

緑川

だからいいんじゃないか。ピチ・ピチの女子高生！ って感じで。

桃江

十六なんてまだ子供よ。…あなたを満足させられるわけ無いわ。

緑川

桃江……どうしちゃったんだ？ お前らしくない。娘のワイセツ写真をネットで

桃江

売り捌いてるくせに。どつちも同じことだろう？

桃江

それは……あなたがそうすれば多少収入の足しになるだろうからって……！

緑川

苦しい家計で生活するより、お金のある暮らしをさせることがあの子のため

緑川

になるからって、あなたが言つたんじゃない！

緑川

ははっ！ そんなことも言つたっけなあ？ それじゃまるで、オレが青の健全な

育成を望んでるみたいな発言だ。

桃江

違ったの？

緑川

生活のことなんてどーでもいいよ、お前も、娘も。ただやらせてくれさえすればさあ。

桃江

そう……。それが本音だったのね……。

緑川

気付かないお前がバカなんだよ。

桃江

判ったわ。でも、せめて……せめてあの子が高校卒業するまでは待つてあげて。

心の葛藤をし、悩んだ末に切り出した桃江。

ずっと緑川を睨むように見ていた青、桃江が自分を庇ったことに驚いて桃江に視線を向ける。

緑川

緑川、物腰柔らかめだった調子がガラリと変わる。

おいおいおい、なんか勘違いしてないか？ お前たち親子が生活できてんのは誰のお陰だよ？ バカな娘が高校行けるのは、誰が学費払ってやってるお陰だよ？！

桃江

そ、それは……

緑川

早く呼べよ。奥にいるんだろ？

動けないでいる桃江。苛立つ緑川。

緑川

早くしろって！

桃江

……判ったから。怒鳴らないで。お願い……。

桃江、力無く言って、ひとり奥の間へ呼びに向かおうとする。
それを見た青、慌てて奥に引込む。

桃江

青ー！ 居るんでしょ？ ちょっと来なさいー！

青

……なに。

青、知らない素振りですつものように不機嫌そうに入ってくる。

桃江

緑川さんがあんたにお話があるって。

緑川、にこりと微笑む。反応しない青。

桃江、言って直ぐに家から出て行く。(下手)

緑川

やあ、青ちゃん。勉強は進んでるかな？

青

…白々しい。(ボソッと)

緑川

いけないなあ、そういう態度は。人に何かをしてもらったときは、お礼を言うもんなんだよ。学校で習わなかったかい？

青

…別に、頼んでないけど。

青、独り言のように小声でボソボソ喋る。

作り笑顔で青を見守っていた緑川、急に大股歩きで近付き、勢いよく青の手首を掴んでねじり上げる。

青

痛っ！

緑川

——言葉にできないようなら、態度で示してもらおうか？

緑川、急に笑顔が消え、低い声で言う。

青、引きつった表情で緑川を振り返って見る。

そして乱暴に青に抱きつく緑川。

照明、フェードアウトが始まる。

青

ちよっと、やめてよ！…やめてー！…！…！

消え行く照明の中、暗闇に青の叫び声だけが響く。

暫くして、薄暗く照明、フェードイン。

少し離れて経っている緑川と青。別の日。

緑川

また学校サボったのか？ こんな時間から家にいるなんて。

青

何の用？ お母さんならパートに出てるけど。

緑川

もうババアに用なんてねえよ、お前が相手してくれるんだから。

青

キャッ？！

そう言いながら強引に青に抱きつく緑川。激しく抵抗する青。

青

ちよっと、約束が違う！ 1回だけだって言うから、こないだ相手したんじゃない！

緑川

バカか、お前。そう言わねえと暴れてしょうがなかったから言ったただけだろ。嘘も方便って言葉しらねえのかよ。

青

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だヤダ！ 止めて…！…！

緑川、青を打つ。効果音。

打たれた勢いで顔を背けたまま止まる青。
緑川、青の顎を掴み自分のほうを向かせる。

緑川
純粹ぶるなよ、青。お前の身体には母親から引き継いだ、穢れた血が流れてんだ。

音楽。照明切り替わる。

左右のソデから通行人がわらわらと歩いて入って来、二人の前を通過てかき消す。緑川、群衆に紛れて出鱈目に歩き出す。青、その場所のまま項垂れている。群衆の中にいる真名は、クレナイではなく本物の方。

女
いやだ。

男
いやだ。

冴子
いやだ。

桃江
いやだ。

村崎
いやだ。

泰星
いやだ。

女
ここに居たくない。

冴子
早く家を出たい。

今様
家出娘の集まるサイト、

泰星
神待ち掲示板。

桃江
なんでもするから、

緑川
お礼をしてくれれば泊めてあげてもいいよ。

女
ここには居られないの。

冴子
家には居られない。

男
だって、

泰星
あの男が、

言葉は重なりながら、ノイズのように続く。

そして、青の呟き。ひととき大きく、はっきりと聞こえる。

青
あたしが、ここに居るからいけないんだ。

この後、セリフを言いながら言った相手を振り返る。

緑川→青、桃江→緑川、泰星→真名、真名→冴子、冴子→真名。

女、男、緑川は先に通行人としてはけていく。

緑川

桃江

泰星

眞名

冴子

眞名

じゃあ、

出逢わなければよかった。

そもその出逢いつて？

出逢わなければ、こんなことにはならなかった？

出逢わなければ、全て丸く収まった？

出逢わなければ……。

いつの間にか通行人たちは全て立ち去り、見つめ合う眞名と冴子だけが舞台に残る。

薄暗かった照明、切り替わって少し明るくなり、場面は夜の駅前に。

舞台は昭和60年。秋。

冴子、誰かと待ちあわせをするわけでもないのに駅前で佇んでいる。

そこに通りかかった高校生の眞名。制服は着ておらず、私服。

通り過ぎようとしたが、気にかかり、ちらちらと振り返って、結局戻ってくる。

眞名

おねーさん、もう終電、終わってもーたで？

冴子

……あなたは？

眞名

オレ？ 電車乗らへんもん。この辺に住んでるから。お姉さん、家どの辺なん？

冴子

あたしは……今里（いまざと）の方。

眞名

遠っ！ 今里って、生野（いくの）のあたりやろ？！ どーすんの？ 今晚。

冴子

……考えてへんかったわ……。

眞名

……何か、あつたん？

冴子

……。

眞名

話、聞こか？ 話したら楽になるかも知れへんで。オレでよかったらやけど……。

沈黙するふたり。風が吹いてるようで、冴子は身を縮めて寒そうにします。

それを見た眞名、迷っていたが、決心して言う。

眞名

……どっか！

冴子

え？

ぼんやりとした様子の冴子、眞名の突然の大声に驚く。

眞名

どっか、中、入る？ あ、あっちにホテルあるし。……そ、そーゆうのって、大丈夫？

冴子

うん……。

恐る恐る、確認するように言う眞名。冴子は目をぱちくりさせて承諾の返事を。そしてふたりはぎこちなく、ホテルの方角へはけて行く。

照明切り替わって翌日。

効果音・街の雑踏。

行きかう通行人もちらほら居る中、眞名は冴子と出逢った場所でうろつろつする。立ち止まり、空を見上げる眞名。そこに、音声で冴子の声が蘇る。

冴子(声)

ごめんなさい。あなたが高校生やとは、思わなくて……。それに、うち、ほんまは恋人がおるんよ……。

行き交う通行人。じつと下を向いて佇む眞名。

その光景に被せて、冴子の声が入る。

冴子(声)

喧嘩して、家飛び出してもうて、どうかしてた。子供もおるのにねえ。……あなたを騙すつもりはなかったんよ。だからもう、会えへん。ごめんね。

……バイバイ。

眞名

はあ……。

冴子の声が終わって、溜め息を吐き項垂れる眞名。

そこに通りかかる同級生の男子高校生。

黒田

紺野？ 紺野じゃねーか！ 最近学校来ねーと思ったら、こんなトコにおったんか！

眞名

……誰？

黒田

「誰？」じゃねーよ！ お前のクラスメイトの黒田やろ！ 学校着なさ過ぎて顔忘れてもおたとか言うつもりか？！

クラスメイトの黒田の顔を認めてガッカリする。

眞名

なんや黒田か……。

黒田

何やとは何や！ 人の顔見て溜め息吐くなよ、失礼なヤツやな。

眞名

早よ行けよ、オレは忙しいねん。

黒田

忙しい、ねえ。あのウワサ、ホンマやったんやな。

眞名

は？

黒田

お前が年上の女にベタ惚れして、駅前でその女を待ち続けてる、っちゅー話や。

眞名

……アホくさ。

黒田

凶星か！ 凶星やな！ で、それから何日経ったん？ 彼女には会えたか？

眞名

九日。一度も。

黒田

完全に無視やな。まあ冷静に考えてみい、こんなトコでアホみたいに待ってても来るわけないつて！ そんなに会いたいんやったら、もっと積極的に動かな！

眞名

積極的って……家も勤め先も知らんのやぞ。

黒田

でも、住んでる地域は判ってるんやろ？ 名前も。

眞名

まあ。でも、それだけやったらなんもならんわ。

黒田 他に何か聞いてないんか？ 恋人の家とかそいつの勤め先とか、家族構成とか。
眞名 何でオレがオトコの話聞かなあかんねん！ ……あ！ 幼稚園に通う息子がお
るってゆうとったわ。

黒田 それや！ それが使える！
眞名 は？

黒田 子供は使えるで、紺野！ 彼女と仲良おなりたかったらな、急がば回れ、まず
はガキの方と仲良くなるんや！

眞名 いや、オレ子供嫌いやし。

黒田 キライでも何でもええんや、フリや、フリ！ ええか、耳の穴かつぽじってよお
聞けよ？ まずは子供の通う幼稚園を調べる。これはある程度簡単なはずや。
住んでる地域にある幼稚園を片っ端から当たっていけばええ。

眞名 オレ、ガキの名前まで聞いとらんわ。

黒田 名前なんて後からすぐ判るって！ 幼稚園が終わる時間になったらな、一足早
めにお迎えに行くんや。ほんで、先生にこう言う。

「僕、黒田房子（ふさこ）さんの代理で来ました、紺野眞名という者ですけ
ど…」

すると先生は笑顔になって園の奥に向かって叫ぶ。

「雅夫（まさお）くん、お迎えの人が来たわよー！」

黒田、器用になりきって身振りも大きくひとり芝居。

眞名、突如して割って入る。

眞名 マサオって誰やねん？ その前にクロダフサコって誰？

黒田 雅夫はオレ！ 房子はオカンや！ ってか喩え話の中の仮名にいちいちツッコミ
入れるな！

眞名 あー、悪い悪い。つい大阪人の血が騒いで…。あ、あと彼女の名前は房子やな
くって冴子やから。徳山冴子。はい、最初からやり直して。

黒田 そおか？ 冴子か。「僕、徳山冴子さんの代理で来ました、紺野眞名という者で
すけど…」って、なんでやねん！…！ 思わずやり直してもおたわ！

眞名 お前、なかなかオモロイな。お前みたいなヤツ、クラスにおるんやったら学校行
こうかな。

黒田 それはどーも。…ってか、お前に付き合おてたら話進まんわ！ えーっと、ど
っからやったっけ？

眞名 園の先生が自然に子供の名前を呼んで本人を連れてくるところまでや。

黒田 そうそう、子供の名前はそうやって自然に判るやろ？

——まあ、2011年頃ならプライバシー保護法の絡みでお前は不審人物とし
て通報されて、即！ 御用やろうけどな。

真名 何でいま二十五年も先の喻え話すんねん？

黒田 ちよつと、時代背景的な釈明をな。まあ、気にすんな。要するに子供の名前は知らんくても問題ないっちゅー話や。

真名 成る程な。で？ その後はどー説明すんねん。

黒田 そーやな、まず先生に聞かれたら、出来るだけ紳士的にこう答える。

「僕は冴子さんとお付き合ひさせてもらっている者です」

真名 アホか！ 嘘もええとこや！

黒田 アホはお前や。こーゆうのはな、事実がどうかは関係あらへん。真実は、周りから固めて自分で作り上げるもんやで。

真名 黒……。お前、黒いわ。名前からして「黒田」やけど。

黒田 何とでも言つて。試合は、結果が全てなんや！ 紺野、お前よお考えてみ？ 正面から勝負して勝てる相手か？ 彼女は一回りも離れた大人の女、その恋人かて当然大人の男やろ？ 対してこっちは未成年の高校生。地位も、経済力も、成熟した人格も、全てにおいて劣ってるんや。

真名 もおゆわんとつて。なんや、落ち込んできたわ……。

黒田 ウソなんてどんだけ吐いてもええ！ 彼女の恋人や、とか、子供がすきやから、とか、高校は早よに終わって暇やから、とか。……けどな、紺野。ひとつだけ、真実は混ぜておけよ。

真名 何？

黒田 お前の、彼女を想う気持ちや。

真名 はあ……。

恰好をつけたセリフで立ち去る黒田。真名、その場に残ったまま。

照明、切り替わる。

場面はシーンへ4の冒頭へ。

泰星、手にネコじゃらしを振り回しながら、昭和60年ごろに流行っていた流めの歌謡曲を鼻歌で歌いながら入ってくる。

無表情（むしろシケた面）でやってきた真名、少し離れたところから、無理やり作った笑顔で泰星に近付いて、適度な距離で立ち止まる。

真名 なに唄ってんの？

泰星、一瞬口を止め無感情に振り返って、直ぐに元に戻って唄いだす。

真名、暫く一緒にフレーズを口ずさんで気付く。

……これ安全地帯？！ 洪つ！……どもののクセに？！

……母さんが好きな唄。

眞名

ああ、冴子さんが…。

泰星、「タッチ」や「想い出がいっぱい」など子供っぽいアニメーションに変える。

眞名、ほつと胸を撫で下ろして、一緒に口ずさむ。

泰星、急に唄を止めて無感情に言う。

泰星

こどもらしく、こんなんが良かった？

眞名、生意気なガキの態度に一瞬引きつった表情を浮かべるが、思いとどまって顔を戻す。

眞名

……別に、何でもええよ。それより泰星、勝手に幼稚園、抜け出したらアカンやろ！

泰星

なに、説教？

眞名

みんな心配しとつたで！ こんなトコに居ったら、何処行つたか判らへんやん。冴子さんかて片親で苦労してお前を育ててんねんから、余計な心配、掛けさせんよーに！

泰星

……だって母さん、時間になつてもお迎え来へんもん。

眞名

帰るで、ほら。

眞名、手を繋ごうと片手を差し出す。泰星、その手を一瞥はするが、ムシして歩き出す。

眞名、出した自分の手を見て引きつった表情になり、手と泰星を交互に覗みつけて小声で罵る。

眞名

こおんの、クソガキっ！ 人の好意を折角……！

眞名、泰星にバレないように一応そそくさと引っ込めて、泰星の横に並んで一緒に歩く。

泰星

眞名。

眞名

んー？

泰星

こんなことしててええの？

眞名

え？

泰星

だって眞名、高校生やんな？ 学校、またサボつたん？

言葉に詰まる眞名。「あ、えと、それは……」など、言葉にならない声で繋い

する。

泰星 バイト帰りに、おれのこと探しに来たんやろ？
眞名 泰星、オレは、

泰星、立ち止まって眞名に対して諭すように言う。

泰星 バイト、辞めえよ。バイト辞めて、ちゃんと学校行きいよ。後悔すんで、絶対！
眞名 ……ありがと、泰星。でもな、オレ、後悔なんてしいひんよ？ バイトしてお金稼いで、泰星のお迎えに行つて。そうやって冴子さんの役に立つことが、ホシマに嬉しいんや。
泰星 ……こっかい、するよ…。

真相を眞名本人には言えない、泰星。同じ言葉を、小さくひとひり呟く。
眞名、複雑な思いをかき消すように、自分に言い聞かせるようなセリフをいう。

眞名 ま、まだ泰星には解らへんかもなー。もちっと大きくなって、好きな人が出来たら、オレの言つてる意味がわかるようになるわ。
泰星 そーかなあ？
眞名 そーなの。

歩き出すふたり。泰星、直ぐに振り返つて。

泰星 あ！ 電話。帰る前に、家に電話せんと！
眞名 ああ、そうやな。

泰星、公衆電話に駆け寄る。ロパクの無音での演技に入る。
照明、切り替わつて眞名にスポット。

眞名 子供は恐い。…特に、泰星みたいなマセガキは、人の心を読んできよる。
そんでもつて案外、的確なコトバを口にするんや。世の中なんでも判つたよーな顔をして。まるで…オレみたいや。

暫くして電話が終わつた泰星。イタズラな笑顔で眞名に駆け寄る。

泰星 いまスッピンやから、化粧する時間が欲しいってさ！
眞名 はは！ これから家に帰るだけなんやから、わざわざ化粧なんてしなくてええ

泰星

のに。

カレシの前では、いつでも綺麗な姿でいたいんじゃないのぉ？

眞名・泰星、ふたりでじゃれあいながら家に向かう。

泰星・眞名

ただいま。

冴子

おかえりー。

冴子、泰星にも眞名にも平等の表情。しかし、申し訳なさそうに、気まずそうにしながらおすおす和眞名に歩み寄る。

実際の冴子は眞名のことを名前で呼ぶことは無く、「紺野くん」としか呼ばない。

冴子

紺野くん……、いつもありがとう。泰星のお迎え、行ってもらっちゃって……

眞名

そんな、ぜんぜん！ オレ、学生で暇やし！ 子供大好きやし！ 気にせんとて！ それに、オレが冴子さんの力になれることって、こんくらいしかないから……。

冴子

何言ってるの、充分よ。ほんま、助かってる。感謝してるんよ。

眞名

……うん。

眞名、嘘を隠すかのように無駄に力強く明るく振舞う。

そんなふたりを帰宅後の片付けをしながら割りと眺めていた泰星、わざとらしく肩を竦めて見せる。

冴子

今日、何食べたい？

泰星

あ、おれ天ぷら！

眞名

何でもええよ、冴子さんの手料理なら。

泰星

天ぷら！

冴子

もう、なんでもいい、が一番困るの！ なんかリクエストして？

泰星

天ぷら。

眞名

……じゃあ、カレー。

泰星

肉じゃが！

冴子

判った。今夜はカレーにするわ。

泰星の声は敢えて無視している冴子。

泰星、暫くの間のこと、力なく呟きながら下手へはけていく。

泰星

じゃあ、おれもカレー……。

玄関のドアの閉まる効果音。

それを確認したふたり、真名は冴子とふたりきりに成れたことにより弾んだ様子になり、反対に冴子は物憂げな表情になる。

何も喋らないけど明らかにわくわくした様子で微笑んでいる真名に、冴子は気まずそうに切り出す。

冴子

あのね、紺野くん。あなたのしてくれてることは嬉しいんよ。助かってるのも事実や。けど、うちは……あなたの気持ちには応えられへんのよ。

真名

判ってるって、そんなこと！ オレ別に、ほんまに別に、冴子さんともう一度寝れるなんて思っで、ここに来てるわけちゃうで。オレはただ、あなたに会いたくて来てんの。だから、気にせんとって。

冴子

……あなたはまだ若いから、今すぐ理解しろ言うても難しいかも知れへんけど。……その感情は、一時的なものに過ぎひんのよ。いくら若く見えても、うちはあなたより十も離れたコブ付きの女。恋に落ちたと思ってるのも、ただの錯覚なんよ。目が覚めたとき、アホな時間過こしたー思おて、後悔しはるわ……。だから、こんなことしてんと、

真名

そんなこと無い！ 錯覚なんかやあらへん！ オレは、冴子さんが！
……好きなんや……。

照明、フェードアウト。

暗転。

照明、フェードイン。

冴子と泰星、部屋の中にいる。泰星、鼻歌を唄いながらお絵かきをしている。
冴子、商品である鞆を紙袋に詰めながら、何やら探し物をしている。探し物が
見付からず、苛立つてくる冴子。

冴子

ちよつと泰星、あんた邪魔！

泰星、特に気にすることなく冴子に場所を譲り、お絵かきを続ける。

冴子

あー、もう！ どこへやったん？！ 泰星、母さんのお仕事で使ってるデザイン
帖知らんか？ コレくらいいの、スケッチブック…

冴子、言いながら大きさを手で指し示す。

泰星のスケッチブックを見ながら、はつとなる冴子。大股で近寄り、スケッチブッ
クを取り上げる。

冴子

ちよつと、貸しなさい！

泰星

あーっ！！

スケッチブックをバラバラと捲る冴子。自分の鞆のデザイン画に行き着き、鬼の
剣幕で叱りつける。

冴子

あんた！ これ母さんの仕事の道具やって知ってるやろう？！ なんでこんな
ラクガキなんてしたん？！ お客さんと相談しながら描いた、バックのデザイ
ンをこんなめちゃくちやにして…！ 母さんが仕事失ってもええんか？！

泰星

そんなん…知らんかったんやもん…。

冴子

また言い訳か！ あんたの言い訳なんて聞きたない！ 家おって邪魔ばっかす
るんやったら、出ていき！

泰星、泣きそうになるのを堪えていたが、限界が来て立ち上がり、泣き出す前
にと急いで走り去る。玄関のドアの閉まる効果音。

息も荒く、肩で呼吸をしている冴子。

暫くして泰星と入れ違いに、村崎が入ってくる。

村崎

玄関、開いてたよ。…どうしたの？

後半は、冴子の様子の変更に気付き声をかける村崎。
場面は、へ5くの回想シーン。

冴子

うち、母親失格やわ……。

村崎

何言ってるんだ。キミはよくやってるよ。

冴子

でも！ 泰星に、きつく当たってしまうんよ。判ってるのに、自分が制御できひん……。手加減して打つ手も、だんだん強くなってきたの、判んねん。

あの子と接するんが、恐いわ……。

村崎

冴子は何でもひとりで抱えすぎなんだよ。だから、どっかにガタが来てしまうんだ。人間なんだから、仕方ないことだよ。自分たちで設立した会社も、子育ても、家事も、それから……オレのことも。ぜんぶ、ひとりで抱え込んでるだろ？

冴子

そんなん、言い訳にすぎひん。みんな一人でやってはることです。

村崎

そんなこと無い。冴子が今やってることは、夫婦で乗り切るものだよ。だから、ぜんぶひとりで背負わないで、半分、オレに背負わせてくれないか？

冴子

——え？

村崎、ポケットから箱を取り出す。その中からリングを取り出し、冴子の手を取って薬指にはめる。

村崎

…僕と、結婚してください。

冴子、驚いて顔を上げる。驚きと感動で声が出ない。

暫く村崎とリングを見ていたが、おずおずと泣き声で切り出す。

冴子

うち、いつもあの子に、お昼、五百円札握らせて、家から追い出してるんよ……？

村崎

うん、結構大きい額だよな。それだけあれば、お弁当と、ジュースと、お菓子も買えるかもしれない。

冴子

5歳ゆーたら、他所の子おは、まだお使いもしたこと無い子やっておるんよ？

村崎

泰星くんが、ひとりで計算出来るようになったのも、キミの教育の賜物だよ。

冴子

幼稚園のお迎えかて、うちが仕事で間に合わへんから、ひとりで長いこと待たせてもーた……

村崎

今は、あの少年が迎えに行ってるじゃないか。

冴子

そうよ……。彼は。…うち、彼と寝たことあるんよ？！

村崎

知ってるよ。前にキミが、正直に話してくれたじゃないか。…誰にだってある、一時の気の迷いさ。もう、気にしてないよ。

冴子、涙声になって。

冴子

それでも、いいって、言わはるんですか？

村崎、にっこりと優しく微笑む。

村崎

だから、ここにいてんだよ。

冴子の両方の手を優しく握って頷く村崎。暫く見詰め合うふたり。それを解いて、村崎、明るく将来への計画を語りだす。

村崎

婚姻届のことだけども。春で、泰星くんも小学校に上がるだろ？ それに合わせて手続きしたらどうかと思うんだ。…あれくらいの年齢の子はデリケートだから、苗字が途中でいきなり「徳山」から「村崎」に変わってしまうと過ごしくいと思うし。

名前の話が出てきて、はっと気付く冴子。冴子はまだ村崎に、泰星と自分の苗字が違うこと、自分たちが在日であることを言っていない。迷いながらも、伝えなくてはならないと決心した冴子、おずおずと躊躇いがちに切り出す。

冴子

あ、あの…そのことなんですけど…実は…

村崎

ん？ 何？

冴子

名前…、あの子の苗字、「徳山」じゃないんです。

村崎

そうだったの？ —— ああ、亡くなった、旦那さんの方なんだ？

冴子

ええ、まあ、そうなんですけど…

村崎

そんなの、気にすることじゃないよ。よくある話さ。

冴子

その、理由が、ありまして…。私と、あの子が同じ苗字を名乗れなかった理由が、あるんです。

村崎

同じ苗字を名乗れなかった、理由？

頷く冴子。少し間を置いて。

冴子

実は、うちは…、うちとあの子は…！

村崎

判った。全部言わなくてもいいよ。判ったから。オレはそんなこと、気にしない

冴子

よ。
え、それじゃあ……？

緊張していた面持ちを解き、ほっと胸を撫で下ろす冴子。

村崎

泰星くんとキミは、血の繋がらない親子なんだろう？

冴子

えっ？！

村崎、勝手に勘違いして納得している様子。

村崎

そうか、そうだったとは気付かなかったよ。ふたり、よく似ているからさ。

——大丈夫。その問題も、この結婚で解決できるよ。婚姻届を出す際に子の入籍届けを書かなきゃいけないだろう？ それを書き直せばいいんだ。

冴子

あの、そうじゃ、なくて……ですね……？

冴子、折角した決心が崩れてしまい、声も小さくしどろもどろになってしまう。
ひとり納得し、それを疑わない村崎、冴子の小さい声には気付かない。

村崎

あ。指輪のサイズ、合わなかったみたいだね。ちょっとゆるいみたいだ。今度、直してもらってくるよ。

村崎、冴子の指からリングを抜き取り、ケースに戻す。

冴子

そうじゃないんですけど……それにまだ、他にも問題が……

村崎

フツ、冴子は心配性だなあ。なんだい、何でも言って？ オレの気持ちは変わらないよ？

冴子

紺野くん——泰星のお迎えに行ってくれている、彼。彼の目的は、小遣い稼ぎや無いんです。そもそも、うちはお駄賃なんて渡したことありませんし……せいぜい、家でご飯食べて帰るくらいで。

村崎

そうなの？

冴子

ごめんなさい。村崎さんに心配掛けたくなくて……いや、嫌われたくなくて、本当のこと、言えませんでした。彼は、うちに会うために、泰星のお迎えに行ってるんです。

村崎

恋愛感情から来ている、というわけか。その感情は、キミにもあるの？

冴子

そんなん、ありません！ だから、いつも彼には言うてるんです。こんなことしなくてもらっても、うちはあなたの気持ちには応えられへん、だからもう止めて、って。何度も……！

村崎

そうか……。冴子はそのことに悩んでたんだな。ごめん、オレが迂闊だった。彼が本気だなんて、思ってたなくて。軽く考えていたよ。

冴子

一度、彼にはキチンと会ってオレの方からも話した方がいいのかもしれないね。どうやって言えば伝わるんやろか。どうやって言えば、判ってもらえるん？

村崎

……誰も傷付かない方法なんて、無いんだよ、冴子。

冴子

確かに、うちが悪かったんだよ。最初、夜の街で途方にくれてた時、声を掛けてくれた彼に着いて行っただけでも、あの子には何度も伝えてきたんだよ？ 何度も、何度も！ でも判ってくれへんの。あの子は泰星に取り入って、今では泰星、あの子の真似して絵えばかり描いてるんだよ？！ あの子、あたしから泰星を奪うつもりなんよ！ そうやって、あたしを手に入れようとするんだよ！

村崎

冴子！ 冴子、落ち着いて！

村崎

あのがき……。冴子をこんなに悩ませて……。子供だからって、何しても許されるわけじゃねえぞ！

頭を掻き毟るなど激しい動きをして今にも暴れだしそうな冴子。村崎、駆け寄って抱き寄せる。村崎の腕の中で、段々、落ち着いてくる冴子。

帰ってきた泰星、冴子が暴れだす辺りから入ってきて隅で声を殺している。

声を押し殺して聞いていた泰星、「あのがき」発言は自分のことを言われていると勘違いして、泣き出しそうになるのを堪えて駆け出す。

音楽。

照明、フェードアウト。

暗転。

照明、フェードイン。

音楽、BGMとして続いたまま。

冴子の居る家の中。

すぐに下手から、眞名と泰星がにこやかに雑談しながら入ってくる。

眞名・泰星

ただいまー。

冴子

お帰り。

泰星

母さん、今晚のおかずは天ぷらにしてよね！

冴子

別にええけど・・・なんでそんなに天ぷらに拘るんよ？

泰星

眞名と勝負してんの！

眞名

はあ？ オレと勝負？ 何の話やねん？

泰星

別にー。こつちの話やもんっ！

眞名

？ ヘンなヤツ。

冴子

泰星、鞆置いたらお外で遊んで来なさい。

泰星

えーっ！ 今日は家におる！ 眞名と一緒に遊ぶねん。

冴子

我假言わないの！ 紺野くんかてアンタの相手ばっかしてたら疲れるんよ、ちよつとは休ましてあげなさい。

泰星

疲れてへんもん！ なあ、眞名っ。

眞名

いや、疲れてる。

泰星

えっ、うそ！ 寝返んの早っ！

眞名

泰星は難しい言葉知ってんやなあ・・・。

泰星

あ！ 話逸らした！

冴子

ええから、早よ外に行ってきなさい。

泰星

ちえっ！ はーい、判りましたよっ。後はお若いふたりで「ゆっくりトウゾー！

眞名

アホいうな、お前が一番若いやろっが！

冴子

全く・・・ヘンな言葉はっかり覚えてくるんやから・・・。

冗談言いながら立ち去る泰星。玄関の閉まる効果音。

冴子、いつもよりも真剣な面持ちで切り出す。その異変に気付いている眞名、遮るようにわざと明るく振舞う。

冴子

紺野くん、あのね、今日はあなたにお話があるの。

眞名

冴子さん、今度の日曜日、映画に行こうよ。センパイからチケット、譲ってもらってん。ほら、ペアで！

冴子

紺野くん……。何度も言うてるけど、うち、あなたとは……

眞名

見て見て、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」ゆうSF映画でな、夏にアメリカでは大ヒットしたらしいでー！

冴子

紺野くん聞いてー！

眞名、笑顔が止まり、一瞬、静けさが漂う。

冴子

あんね、うち、こないだ村崎さんに正式にプロ……

眞名

そんな話、聞きとっない！

大きな声で言葉を遮った眞名。ビックリした冴子が今度は止まってしまう。

眞名

オレ、焦ってるんかしらん。いや、焦ってるんや。早う大人になりたいくて。せやないと、冴子さんが遠くに行ってしまうんが判ってるから……！

言いながら、冴子に駆け寄るようにして手を掴む。

逃げるように少し後ずさる冴子。それを追いかけるように、追い詰めるように近づく眞名。

その弾みで、冴子のポケットからリングのケースが床に落ちる。

冴子

あ、

それに気付き、目をやる眞名。

眞名

……うそや。それって、婚約指輪？

慌てて拾って、静かに頷く冴子。

冴子

だからさっき、言おうとしてたんやないの。うち、こないだ村崎さんに、正式にプロポーズされたんよ。だからもう、あなたとは会えへん。

眞名

……うそや。

冴子

ウソやない。ホンマのことなんよ。

眞名

嘘や。じゃあ、じゃあ！ 冴子さんはそいつに隠してること全部言うたんか？！ 泰星と苗字が違ふこと、在日やゆうこと、ホンマの名前は徳山冴子やのおて、フ

アン・フージヤンやつてこと、ぜんぶー！

冴子

そ、それは……

眞名

まだなんやな？ まだ言えてへんねんな？ そんなん正式に婚約したとは言わ

れへんわ。秘密を全部知っても、逃げ出さへん男やないなんて保障、何処にある？！

冴子

眞名

逃げ出すやなんて、村崎さんはそんな人と違う！

じゃあ何でそんな大事な人に冴子さんはホンマのこと言われへんねんや？！
言うても逃げられへん自信があるんやったら、もうとくに言うてるんと違う
か？……オしは、全部知ってる。オしやったら、ぜんぶ受け入れられる。逃
げたりせえへん！ 泰星とも仲良おなっだし、何の障害もないやろ？ 後は、だ
から、オしが十八になるまで待ってえや、頼むわ！

冴子

痛い、痛いわ、放して！

冴子の手や肩を掴んで揺さぶっていた眞名、嫌がられていることに気付いて、自
分の心が傷付いてしまう。

眞名

…………ごめん。

眞名、冴子をひとり残して立ち去る。

BGMとして流れていた音楽、ポリウムアップ。

照明、切り替わる。場面転換。

入ってきた村崎・泰星・眞名・クレナイ・青たちが冴子の周りを駆け巡って、最後
に舞台には冴子・泰星・村崎のみが残る。

場面は、へぐの中盤シーンへ。

下手のソデから登場した村崎、玄関に上がり入って来た様子で。

村崎 よかった、まだ出掛ける前で。

村崎 どうしたんですか、村崎さん。待ち合わせは5時にツインタワーのロビーやっ
たはず……

村崎 うん、そうなんだけど、やっぱり冴子が出掛ける前にどうしても渡しておきた
いものがあった。

冴子 え？ 渡しておきたいものって……？

冴子と村崎、恋人同士の甘い雰囲気を書わせつつ、泰星が傍にいることに気付
かず完全にふたりの世界に入っている。

村崎、ポケットからリングの箱を取り出す。

村崎 これ。

冴子 まあ……！

村崎 スカイレストランで渡しても良かったんだけどね。折角だから、早く嵌めておい
て欲しくって。——うん、今度はピタリだ。

村崎、言いながら冴子の手をやさしく取り薬指にリングを嵌めてあげながら言
う。そしてイタズラにニヤリと笑って。

村崎 これで、キミは正式に俺のもの。——…なんて、ちょっと独占欲出しすぎか
な？

冴子 ふふっ。ありがとうございます。とっても嬉しいです。

村崎 よかった。なんせ、冴子にはライバルが多いからなあ。キミのおませなボウヤ
に、あの生意気な——

振り向いた村崎、ふと傍にいた泰星と目が合い、驚いて飛び退く。

村崎 うわっ！？

泰星 …………こんにちは。

村崎 な、なんだ、ボーズ、いたのかよ。

村崎、驚いて取り乱しかけたが、すぐに笑顔を作って泰星には優しく接しようとする。

冴子

た、泰星……！ まだ家の中に居ったん？！ あんたは早よお外で遊んできなさい！ お、お友達が待ってるやろ？！

村崎

冴子、前にほら、学生の家庭教師を雇ったとか言ってなかったか？ ほら、えーつと、なんて言ったかな……えーつと……！

泰星

……もしかして、真名のこと？

村崎、機転を聞かせて言ったつもりだが、泰星は逆にますます不機嫌になり怪訝な眼差しを村崎に向ける。村崎は泰星と共通の話題で喋ろうと思い、真名の名前を出す。

冴子、真名の名を聞いて、複雑な心境に。

村崎

そんな名前だったけ？ ボーズ、お前そのマナくんと仲いいんだろ？ 今日に来てないのか？

泰星

来るわけ無いやん。母さん、今日はオジサンと会う予定やったんやろ？

冴子

泰星！

冴子、足早に駆け寄り泰星を打つ。効果音。

泰星、暫くの間のおと、はっとした顔で冴子を振り返る。

冴子

あんた、誰に向かって口利いてるの？！ 謝りなさい、今すぐ村崎さんに謝りなさい！

冴子を見上げる泰星の表情、睨むような表情に変わる。

村崎

まあ、そう熱くなるなよ。そうだ、ちようどいい、今日は泰星くんと三人で食事に行かないか？ 彼にも、聞いて欲しい話があるしね。

そのマナって子は、今日はくる予定じゃないんだよね？

やめて！ 彼は……紺野くんは、いつも泰星を連れてきてただけ。うちから誘ったことは一度もないの……！ どうしてそんなことうちに聞くんですか？！

冴子

冴子、浮気を疑われている気分になって取り乱す。

泰星、睨んでいた鋭い目付きが、段々泣き顔に変わっていく。

下手より、嬉しそうな表情で真名が登場。手にはプレゼントの包みを抱えている。それを眺めては、にににとして、徳山家の玄関へ向かう。

村崎

落ち着けて、冴子。何もキミを責めてるわけじゃない。

冴子

判ってる、判ってるんよ。泰星、お願いやから早くして！早く出てって！これ以上、お母さんを困らせんといて！

眞名

泰星、泣くのを堪えて静かに、でも勢いよく玄関（下手）に向かって駆け出す。

玄関先で、飛び出してきた泰星と、呼び鈴を鳴らそうと突っ立っていた眞名、勢いよくぶつかり、泰星は後方へ尻餅を着く。

眞名

わっ！だ、大丈夫かよ？

泰星

眞名……………！

冴子

うそ…何で？

眞名、転んだ泰星に手を貸して、立ち上がらせてやる。

冴子

紺野くん…どうして此処へ…？

冴子、苛立ちと不安を押し殺したような声。

それには気付かない眞名、慌てて包みを背中に回し、いつも通り明るく振舞う。

眞名

あ、冴子さん！突然押しかけちゃってごめんなさい。でも今日は、どうしても驚かせたくて、黙ってん。

冴子

…何の話？

眞名

んーっとね、実は、今日はプレゼントを持ってきました！じゃん！

眞名、みんなに見せるように、背中に回していた包みを前面に押し出す。

村崎・冴子、それを見てちよつと顔をこわばらせる。村崎、彼に詰め寄ろうと一歩前へ出る。

眞名

いま世間を賑わすファミリィ・コンピューター！略してファミコン！泰星、6

泰星

歳の誕生日、おめでとー！

眞名、包みを泰星に手渡し、派手に拍手します。予想外の展開に驚きながらも

感動して泣きそうになる泰星。

冴子

やだ…今日やったん？！

泰星の誕生日に気付いていなかった冴子、二で気付いてはつとなる。

泰星

うー……。眞名あ、ありがとお。これ、すんこい高かったんやないの……？

眞名

子供はそんな心配なくてええから！ 素直に喜んできなさい！

泰星

でもお……。眞名が万引きとか……強盗とか……やってないか心配で……

眞名

そつちかいっ！……「心配なく！ それはセンパイから安く譲り受けたもんやから。」

泰星に向かっていた眞名、冴子の方に視線を切り替えて身振り手ぶりで明るく話す。

眞名

あ、冴子さん冴子さん、知ってる？ これ。家庭用カセット式ビデオゲームって言うてな、テレビに繋げてふたり以上で楽しめるゲーム機なんやって。案外、大人もはまっちゃみたいよ……

眞名、冴子の背後に村崎の姿を認めて語尾が段々小さくなっていく。

啞然として村崎から目が離せなくなる眞名。村崎も睨むように眞名を見続けている。

ふたりの間で、ただおろおろするしか出来ない冴子。

泰星、プレゼントを抱えたまま眞名の背後に身を隠すように回り込む。

村崎

キミが、コンノマナくん？

眞名

え？ えつと……あなたは……？

村崎

私は冴子さんの婚約者の村崎務だ。

眞名

……。

村崎

キミの話は聞いているよ。よく泰星くんの面倒を見てくれるそうじゃないか。

眞名

彼女も、無論、私も感謝しているよ。いい家庭教師を雇ったってね。

村崎

か、家庭教師？！ オレが？！

眞名

何だ？ 違うのか？ ベビーシッターだったかな？

眞名

……冴子さん、これ、どーいうこと……？

冴子

……。

眞名

オレは、ベビーシッターやったん？

村崎、いい機会だと思って眞名に詰め寄っている。多少の嘘をついて傷つけてでも

眞名に諦めて貰わなければ、と思い、毅然とした態度を取る村崎。

冴子、眞名から視線をそらし、口をへの字に噤んで黙ったままで居る。

眞名

なあ冴子さん、オレは冴子さんにとつて、ただのベビーシッターやったん？　なあ。何とか言つてや、冴子さん……！

冴子

……そつや。

眞名の顔が見れず、村崎の横顔をちらりと見る冴子。村崎は眞名を牽制するように見続けている。冴子、苦しい気持ちながら腹を括つて言い放つ。

目を見開き、唇を噛み締める眞名。

次の瞬間、踵を返して勢いよく玄関から飛び出し走り去る。

同時に、シーン(6)と同じ、激しくも哀しい音楽が流れ出す。

泰星

眞名！

泰星、眞名がはけてから直ぐに後を追って走って追いかけていく。

照明が切り替わり、役者全員が舞台上を駆け回っていく。

眞名、やがて中央で力尽きたようにとぼとぼと歩き出す。

それを追って走ってきた泰星、歩いている眞名に追いつく。

音楽、フェードアウト。

泰星

眞名……

掛ける言葉が見付からない泰星。眞名も答える言葉が無く、そのままとぼとぼと進んでいる。

泰星

大丈夫？

答えはなく、暫く沈黙で歩き続けるふたり。

眞名、急に独り言のように小さめに喋りだす。

眞名

そーや。オレとお前は似たもの同士やったんや。……家に帰っても母親に構ってもらえへん、家に自分の居場所がない。今のオレに、そっくりや。親にも、冴子さんにも、誰にも構ってもらえてへん、今のオレに……。

小さく歩きながら一周して泰星と向き合う眞名。

暫く互いに見詰め合うふたり。

眞名

：「冴子さん、あのオッサンと結婚するんやてなあ。そしたら、オレも泰星も、邪魔モンやろーなあ……」

眞名、虚ろな眸で言い、泰星の首に向かってゆっくりと手を伸ばす。

眞名

かわいそうなことや。オレも、冴子さんも、お前さえ居らんかったら、もっと上手くいってたかしらんのに………！

まさか眞名に殺されようとしているとは夢にも思わない泰星。泰星、眞名は泰星を抱きしめようか迷っているのだと勘違いしている。

眞名、泰星に手を掛ける寸前、泰星の言葉で手を止める。

泰星

…ねえ。母さんにも、「こうしようとした？」

眞名

眞名、「こうしよう」と…「を」殺そうと」と聞き間違える。

えっ……！ 殺そうと、した？

心を読まれたかのような泰星の発言にたじろぐ眞名。

そんな眞名の心境を思い違っている泰星は、勢いよく自分から駆け寄り眞名に抱きつく。手が離れてしまわないように掴みなおすように、きつく、きつく。

泰星

…だから、前に言ったやん。」後悔するで」って。

驚く眞名。抱きつかれたことにも、自分が泰星に慰められようとしていることにも驚いて、言葉にならない。

泰星

辛いよなあ！ 誰にも構って貰えへんくって、淋しいよなあ！ 帰る場所がないんは、もお嫌や！

泰星、自分を指しているのか、眞名を指しているのか判らない言葉を泣きながら、膝ま着いて眞名の腹に顔を埋める。（身長差の演出も兼ねて）

眞名、ゆっくりと頷く。顔を上げず、何度も頷く。

そして、今度ははっきりと声に出す。

眞名

その通りや。……お前は、オレの、合わせ鏡やったんやな……。

その言葉を聞いた瞬間、泰星が声を上げて泣き始める。嗚咽を漏らすように、我慢する声が漏れるように泣く。

泰星

うう、うつ、うつ……！

暫く泣き続ける泰星。なだめるようにしてやる眞名。泰星が落ち着いてくるのを待つて、静かに眞名が切り出す。

眞名

なあ、泰星。オレと一緒に、暮らさへんか？

泰星

え？

眞名

居場所が無いんやったら、自分で作ればええんや！ 小学校も、うちから通えばええやん。

泰星

そんなこと、出来るん？

眞名

大丈夫や、任しとき！ 名前かてな、「くれないせい」でも「オ・ネシン」でも、自分のすきな方を名乗ればええ。

泰星

名前……どっちがええんやろ？ どっち名乗るのが、ええんかな？

眞名

泰星、お前次はもう小学生なんやぞ！ これからは、自分で決めなあかん。

泰星

そんなん、急に言われても困るわ。

眞名

大丈夫や！ 何が正しいとか間違いつか、あらへんねや。オレは、お前が決めた道を信じる。……お前が正しいと思ったことが、真実なんや。

泰星

……おれが、決めたことが真実……。

きりりとした表情で眞名を見据える泰星。暫く考える。

泰星

じゃあ、おれ、これからは……。

音楽、ボリュウムアップして言葉をかき消す。

照明、フェードアウト。

少し長めの暗転。

港、波の効果音。場面は現代へ戻る。

青

それからクレナイは、「オ・テシン」って名乗るようになったわけだ？

クレナイ

そ。――あの時は、眞名に一人前に扱ってもらったことが嬉しくて、自分は母さんの言いなりにばっかしならんくてもええんやって、自分で選んでもええんやって初めて思えて、一生懸命考えた。子供なりにな。

そんで、それまで母さんと過ごしてきた、辛い思い出の多かった日本名を捨てたんや。……先のことどうこうなんて、考えてへんかったよ。ただ単純に、母さんに反発して生まれ変わりたいかっただけなんや。

青

……サエコさんは、ただ生きるのに必死だったんだよ。自分たちが立ち上げた仕事を上手く回すこと、幼い息子と食べていくこと、理解ある恋人を大事にすること。……お母さんは、決してクレナイのことがキライだったわけじゃない。

クレナイ

ああ。大人になるに連れて、薄々判ってきたよ。あの頃まだ二十台だった母さんが、幼稚園児のガキをひとりで抱えながら、人を雇う立場で仕事をして、恋人との時間を作って、更にちよつかい出してくる高校生に気を遣ってな。大人になって、理解は出来た。――けど、辛かった記憶は消せへん。

青

クレナイ……。

クレナイ

だってな、オレの誤解やったとはいえ、幼き日のあの想い出は、オレの記憶の中では紛れもない真実なんや。……オレはガキで、自分のことしか見えてなかったから。……ええ歳こいて、ダサイこと言うてるって、思うか？

青、静かに首を横に振る。

青

……思わないよ。恰好いいとか、悪いとかなんて。……じゃあ、あたしも無理なのかな……。

クレナイ

お前が？

青

あたしね、大人になったら、あの人のこと、赦してあげれるかも、って思ってたけど。時が経てば記憶が薄れて考えが変わるのかも、なんて考え、甘いのかもしんない。――ま、今は赦せないんだけどね。

クレナイ

仕方ないんとかうかな。ひとの心なんて、読めへんねんから。

クレナイ、舞台中央奥側で、ダンボールと毛布を使って寝床を整え始める。

青、それには気付かず、自分の考えの中に浸ったまま。

青

…そうだね。

クレナイ

いつか、赦せる日が来ればええよな。オレも、お前も。

青

あたしたち、同士かもね。似たもの同士。…だから、惹かれてしまうのかな…。

寝床を整え終えたクレナイ。わざと青の言葉が聞こえて無かったかのように。

クレナイ

今夜はもう寝ろ。屋根のある部屋の中やのおて悪いけど。

青

ねえ。あたしやっぱ、クレナイのことすきだよ。

青、ひときわ力強く、訴えるようにクレナイに向かって言う。

クレナイ、少し困った様子で。

クレナイ

ああ、判ったから。寝ろって。傍についてやるから。

青

うそ！ あたしが寝付いたら黙って消えるつもりなんでしょ？！

クレナイ

アホ抜かすな。こんなトコに若い女の子ひとり寝かしたままトンスラするほど鬼畜とちゃうわ。

青

ホントに？ 何処も行かない？

クレナイ

当たり前や。お前、オレをなんやと思うとるんや。

照明、フェードアウト。

波の効果音少し上がる。(セリフが上がる手前まで)

クレナイ・青、そのまま、ダンボール等のみ片付ける。

青

ねえ、クレナイ。もう寝た？

答えないクレナイ。けど、起きていることを確信している青、そのまま続ける。

青

…何もしないんだね。

クレナイ

言っただやろ？ 女とガキにはキョーミねえって。

青

…また、会ってくれる？

クレナイ

さあなあー。

青

ねえ、一回くらいやっとうろよ。

クレナイ

ガキがそんな言葉、言ったらアカン。

青

ねえ、あたしらの関係って、何？

答えないクレナイ。少しの間の後、痺れを切らした青。

青

だって、このままじゃ！ あたしたち、ホントにただの他人じゃん！ そんなの厭だよ！

クレナイ

…判ってねえなあ、お前。

青

…え…。

クレナイ

そんなことして繋がつとく必要なんでねえよ。…ってか、そんなんじゃ繋がんねー。そんな関係、このゴムみたいに、すぐ破けてまうんや。——ホンマは、お前かて判ってるんやろ？ なあ、同士？

今度は青が黙る。

波の効果音、また少しアップする。

クレナイ

…オレな、三十歳を期に、祖国ってヤツを見に行こーと思うんや。

青

韓国に？

クレナイ

ああ、もう釜山港（プサンハン）への乗船切符も買ったしな。

青

それって、いつ？ クレナイの誕生日って…確か…——えっ、明日じゃん！

波の音上がっていく。

波の音フェードアウト、重ねて夜明けの雀の鳴き声。

照明もそれに合わせてフェードイン。

エンディング

港で朝を迎えたふたり。

青 もう、行っちゃうんだね……。

クレナイ 辛気臭い顔すんなや、すぐ戻ってくるんやし。

青 え？

クレナイ こんなん、ただの観光ビザやもん。

青 そーなの？

クレナイ そりやそーやって！ だってオレ、あっちに知ってる親戚なんておらんねんで。海外行くんも、パスポート取るんも、初めてやしな！

青 あはっ……そーなんだ……。

クレナイ あ、せやせや！ これ、お前に渡しとくわ。

名刺を取り出し手渡すクレナイ。

クレナイ 行くとこなくって困ったら、そこに行ったらええ。その人なら青のこと、助けてくれはるわ。

青 なーに？ これ……「紺野眞名法律事務所」——これっ、この人って！

クレナイ ははっ！ その人、ごっつ年上好きやから、お前みたいなちんちくりんに手え出さへんし、安心やろ？

青 ちんちくりんって！ ちょっと、失礼ね！

クレナイ はははっ！

楽しそうに笑うクレナイ。

青、膨れっ面をしながらも貰った名刺を眺めて、目の前に居る「泰星少年」と眞名の過去に思いを馳せる。

青 でも……うん、そっか。そっかあ……。

クレナイ なんや？ ひとりでニヤニヤして。気色悪い。

青 なんでもない。

船の音が聞こえてくる。クレナイの乗る船の出発の時間が近付いている。別れのときが、迫っている。

青 ……いつてらっしやい。元気でね。

黙って、けど笑顔で頷くクレナイ。

名残惜しい青。まだもう少し、一緒にいたい気持ちを押さえ込んでいる。

青

…バイバイ。

一度は背を向け、乗船場へ向かおうとしたクレナイも、ちらりと振り返って、やっぱりもう一度、青の元へ駆け戻ってくる。

クレナイ

青。ちよつと目え瞑ってみ？

青

え？ ええ？！ うん…。

青、キスされるのではないかと思い、身構えながらも、身を委ねようとする。クレナイ、自分の首から下げてたペンダントを青の首に掛けてやる。

青

え？

ペンダントの重みで気付いて目を開ける青。

微笑んでいるクレナイ。

クレナイ

オレ、けつこうスキやで、お前のこと。

エンディング曲。

驚いている青を残して、足早に乗船場へと消えていくクレナイ、下手にはける。

完